Ⅴ　研究奨励校・研究指定校における研究実践

1　学力向上事業に関わる研究奨励校

（1）　室蘭市立旭ヶ丘小学校

【研究主題】

自ら学び、思いや考えを伝え合う子の育成
～　言語活動を基盤とした学び合いを通して　～

（2）　室蘭市立本輪西小学校

【研究主題】

生き生きと活動に取り組み、思いを表現できる子どもの育成
～　言語活動を重視した授業を通して　～

2　パイロットスクール事業に関わる研究指定校

（1）　室蘭市立大　沢小学校

【研究主題】

響き合う学びの創造
～「確かな力」を育てる「豊かなかかわり」を通して　～

（2）　室蘭市立本室蘭小学校

【研究主題】

生き生きと学び、豊かに伝え合う子の育成
～　表現する喜びを感じながら　～

（3）　室蘭市立港　南中学校

【研究主題】

生徒の実態に即した基礎基本の学習、生活支援の充実を目指して
～　生徒指導の機能を生かした教育活動を通して　～

Ⅴ　研究奨励校・研究指定校における研究実践

1　学力向上事業に関わる研究奨励校

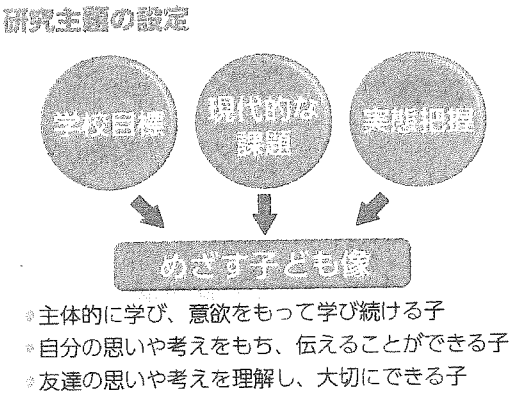
（1）　室蘭市立旭ヶ丘小学校

【研究主題】　　自ら学び、思いや考えを伝え合う子の育成
～　言語活動を基盤とした学び合いを通して　～

研究主題

（1）研究主題・副題

本校は、平成２２年度旧中島小学校と日新小学校の統合により開校した。その際、学校教育目標「学び合う子」を具現化するべく、児童が自ら進んで学習し学び続けるために目指す子ども像をかかげ、研究実践に取り組んでいきたいと考えた。この目指す子ども像については、学校教育目標のほか、学習指導要領改定などの今日的な課題、本校児童の学力学習調査の結果、教職員による研究に関するアンケートや保護者アンケートによる実態把握の面からも考え次の３つのように設定した。



そして、このような子どもを目指すため「自ら学び、思いや考えを伝え合う子の育成」～言語活動を基盤とした学び合いを通して～という研究主題・副主題をかかげた。

研究主題

「自ら学び、思いや考えを伝え合う子の育成」
～言語活動を基盤とした学び合いを通して～

＜主題についての押さえ＞

「自ら学び」とは・・・

子どもが「自ら学び」とは、自分の意思や目的に向かい、能動的に行動することである。指示を待ったり受動的であったりするのではなく自ら判断しその考えを大切に学ぼうとすることである。進んで課題を解決するために、様々な方法で取り組み、新たな発見をする。そのような主体的な子どもの姿を求めている。

「伝え合う」とは・・・

自分の思いや考えをしっかりと持ち自分の言葉を使って相手に伝える力、友達との関係の中で、互いの立場や考えを大切にしながら、理解する力と押さえる。集団の中で子どもたちが豊かに伝え合う授業を通して、互いに思いや考えを広めたり深めたりすることのできる子どもを育てていきたい。

＜副主題についての押さえ＞

「言語活動」とは・・・

「言語活動」とは、「話すこと」「聞くこと」や「書くこと」「読むこと」に関する活動で、発達段階に応じて、読み取る・記述する・記録する・報告する・説明する・まとめて表現することである。言語は国語科で学習の対象であると同時に、学習を行うための重要なものである。各教科等においては、国語科で培った能力を基本に、それぞれの教科の目標を実現する手立てとして言語活動を充実させる必要があると考える。

（２）仮説

仮説

仮説１　個に応じたきめ細かな指導を工夫することにより、主体的に意欲を持って学び続けることができるのではないか。

仮説２　多様な表現方法を身につけさせ、学習形態を工夫することにより、自分の思いや考えを伝え合うことができるのではないか。

これら二つの仮説については、後ほど説明する視点にそって、授業を通し検討を積み重ねてきた。限られた時間の中、より充実した授業の提案・検討を目指し、ブロックごとに提言を作成しながら進めてきている。提言には、「児童の実態」、「本時で取り組んだ具体的な内容」を視点に沿って明記している。

校内授業研、また公開研究会の際も、指導案とともに配布しあらかじめ示した上で授業を見て、協議につなげていけるよう進めてきた。

低学年ブロック　提言

＜児童の実態＞

【話す】
・発表しようという意欲があり、自分の思いや考えを伝えようとする児童が多い。
・声の大きさや姿勢、発音を意識してはいるが、声量の足りない児童もいる。
・自分の気持ちだけではなく、根拠を明らかにしながら話すことが少しずつできてきている。

【聞く】
・一生懸命話を聞こうとする意欲をもつ児童が多い。
・話している人の方に顔を向け、うなずきながら聞くことができる。
・大事なことは何か考えながら聞くことができる児童もいる。
・友達の発表と自分の考えをくらべながら聞くことができる児童もいる。

【話し合い】
・近くの児童と進んで交流することができる。
・ペアでの学習はできるが、３人以上になると進行役などの役割分担が難しい。
・友達の意見を聞いて、自分の考えを修正できる児童が多くなってきた。

【書く・読む】
・プリントの枠より多く書こうとする意欲をもつ児童が多い。
・メモ書きや短い文章作りは、ほとんどの児童ができている。
・順序立てて書くためには、個別支援が必要な児童が多い。

＜本時で取り組んだ具体的な内容＞

〔視点　1〕言語活動を充実させる工夫

①伝え合う力を育成する学習指導の工夫

身近な体験を想起してまとめることで、自分の考えを伝えることができるのではないか

・身近な題材（鬼遊び）を選択することでの意欲の喚起、内容理解
・選んだ題材（鬼遊び）の動作化によるイメージ化、動作化を通した言語化
・発表内容のワークシートへのまとめ

〔視点２〕指導方法・指導体制の工夫改善

①個に応じたきめ細かな指導の工夫

ワークシートに書くことにより、内容を理解しやすいのではないか

・段階的に積み重ねたワークシートの活用
・ワークシートに構成の枠（「はじめ」「中」「おわり」）の設定
・「はじめ」「おわり」の文章形式の提示

既習事項を振り返ることで、発表に読み取ったこと生かせるのではないか

・前時までの学習内容（掲示物）の振り返り
・板書、ワークシートによる文章構造の振り返り

②指導方法・指導体制の工夫改善

様々な学習の場を設定することで、意欲的に学習に取り組むことができるのではないか

・学習の場（個別学習、ペア学習、全体学習）の設定
・個別学習による内容理解
・ペア学習による発表意欲の喚起、内容理解の深化
・全体学習による学習内容の確認

研究内容

（１）年次計画（３ヵ年計画）・・・本年度２年次

平成２２年度　授業研究（ブロック）を通した主題・仮説の検証、研究概要の見直し

↓

平成２３年度　めざす子ども像の確認、授業研究（全学級）を通した主題・仮説の検証
具体的な方策・手立ての検証。「公開研究会（中間発表）」の開催。

↓

平成２４年度　授業研究（全職員）を通した主題・仮説の検証、具体的な方策・手立ての検証。「公開研究会（３年間のまとめ）」の開催。

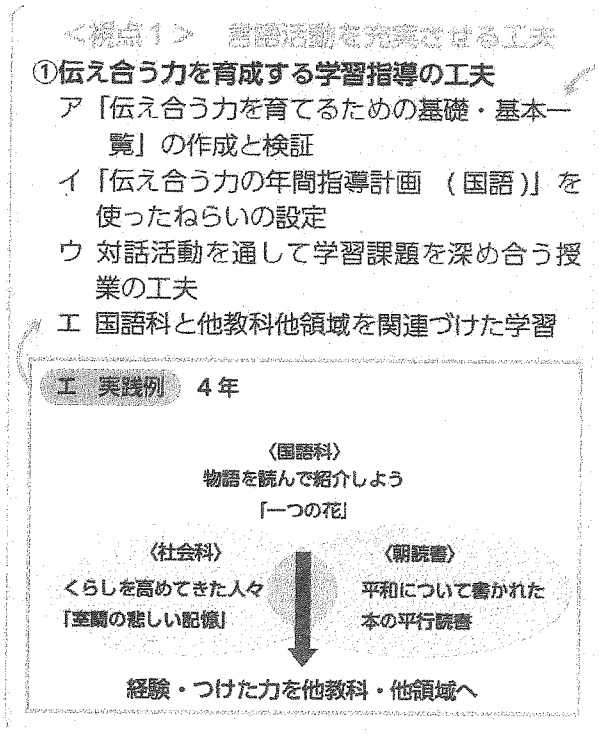
今年度は、３ヵ年で計画しているうちの２年次目にあたる。昨年度は、土台のないゼロからの出発ということで、研究の概要について時間をかけ全職員による話し合いを大切にした。その後、２学期よりブロックで１本の授業を出し合い、授業を通した主題・仮説の検証を目指した。年度末には、概要についても見直しを行い２３年度につなげてきた。

今年度は、「室蘭市学力向上事業研究奨励校、胆振教育局胆振管内小・中学校教育実践研究奨励校」の二つの指定を受けてのスタートとなった。２２年度で見えてきた児童の実態を大切に、再度「目指す子ども像」を確認・修正することから始めた。さらに、昨年度の成果と課題から、研究主題も現在のものへと一部変更している。

また、学習指導要領改定に伴い教科書が大きく変わることも考慮し、教科も「国語科と算数科」から、「国語科」のみに絞って研究をすすめることとした。

（２）研究の視点

仮説の説明でも、触れたが本校ではより具体的に仮説を検証するために、二つの視点から授業を通し協議を行っている。

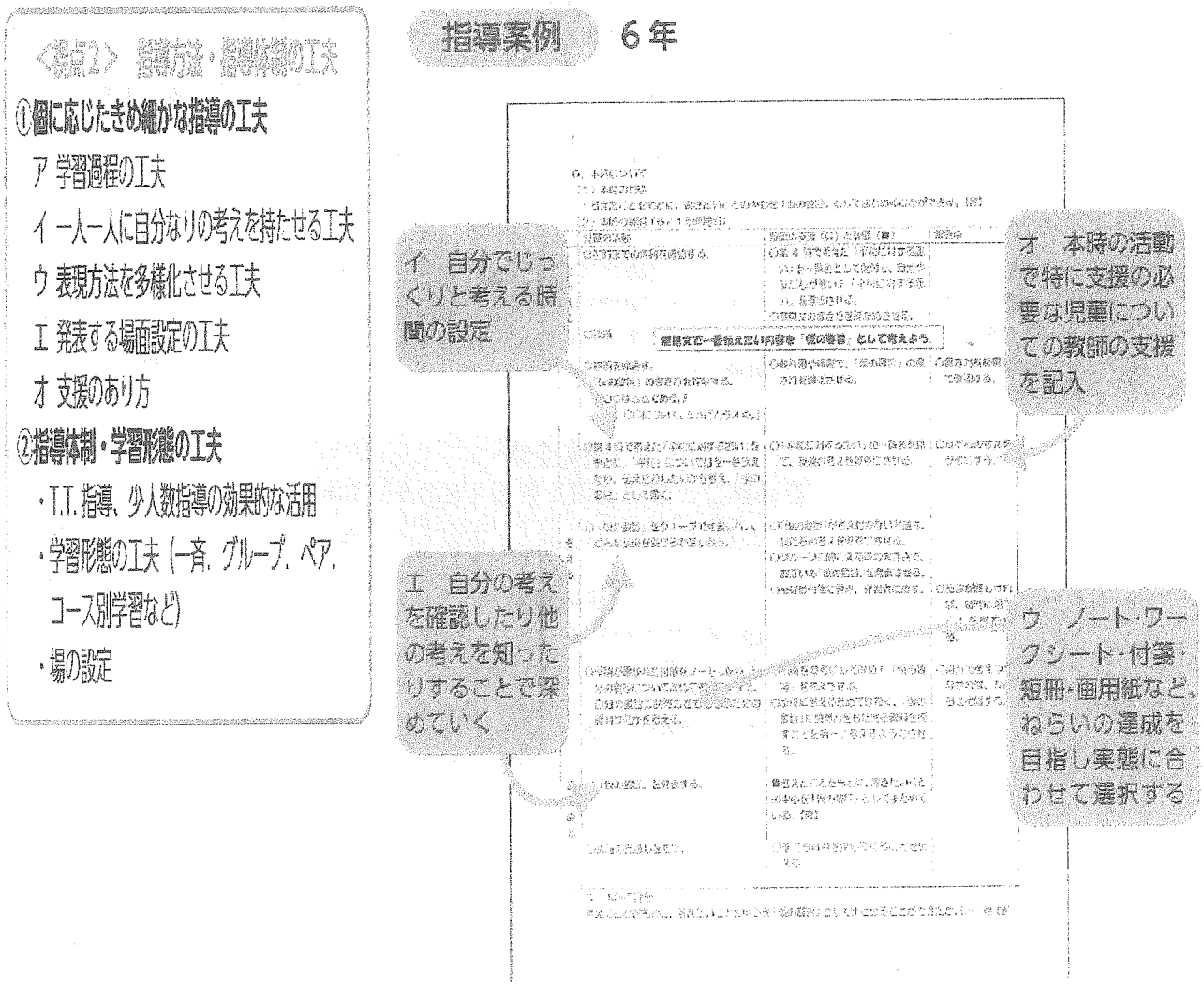


	基礎的・基本的な力	育てておきたい具体的な子どもの姿	育てる時期 1年	2年	3年	4年	5年	6年
言語事項	姿勢よく発表する力	しっかり立つ、相手の方を向くなど姿勢よく話す	◎	◎	○	○	→	→
	発音に気をつけて話す力	口をはっきり開き、はきりした発音ではなす	◎	◎	○	○	→	→
	適当な声量で話す力	場に応じた聞き取りやすい声の大きさで話す	◎	◎	○	○	→	→
	適格な速度で話し力	速すぎず、遅すぎず話す	◎	◎	○	○	→	→
	適切な言葉を用いて話す力	場に応じて丁寧語、敬語を用いて話す	○	○	◎	◎	→	→
	メリハリをつけて話す力	音調の抑揚や強弱、間の取り方を考え話す			◎	◎	○	○
話す	話題に沿って話す力	集中観察「付け加えます」「そのわけは」などを使って話す	◎	◎	○	○	○	○
	順序に気をつけて話す力	時間の流れに沿って話す	◎	◎	○	○	→	→
	場を意識して話す力	相手や目的に応じて話す			◎	◎	○	○
	筋道を立てて話す力	出来や事実をあげながら話す			◎	◎	○	○
	物語に関わるように話す力	感想と意見を区別、数値の引用、図表などの工夫			○	○	◎	◎
	表現的な表現を工夫する力	相手を説得できるように事例を挙げるなどして話す					◎	◎
	話題を選択する力	身近なところから話題を見つける	◎	◎	○	○	→	→
	応答する力	ペアの対話などで質問したり答えたりする	◎	◎	→	→	→	→
	紹介する力	身近なことなど身近な話題を紹介、報告する	◎	◎	○	○	○	○
	説明する力	話を区切り、作り方や使い方、道順など分かりやすく話す	○	○	◎	◎	→	→

視点１は「言語活動を充実させる工夫」。具体的な方策としては、まず一つ目に、年度始めに作成した「伝え合う力を育てるための基礎・基本一覧」をあげたい。こちらは、発達段階に応じて本校の児童が継続的に伝え合う力をつけていけるよう「話す・聞く・話し合う」などの基礎・基本的な力を「いつ、どのような姿を目指して育てていくか」をまとめたものである。

二つ目に、「国語科における伝え合う力の年間指導計画」を使ったねらいの設定をあげたい。こちらは、学年ごとに単元や教材・目標及び内容を記載し、どのような伝え合う力をつけるか具体的に示しています。これを意識して活用することにより、他教科他領域との関連についても考えやすくなった。これら二つの資料については、今後加除・修正しながら旭ヶ丘のものにしていきたいと考えている。パンフレットには、４年生で２学期に行った国語科「物語を読んで紹介しよう・一つの花」での実践例をあげた。社会科でもともと「一つの花」の学習後に、

戦争に関わる学習が組まれていた。そこで、社会科「戦争と人々の暮らし」を計画的に入れ替えることで、国語科「一つの花」を学習する際、物語文に出てくる背景や登場人物の気持ちが読み取りやすくなるようにした。また、同時に朝読書の時間を使って「平和をテーマにした本」を平行読書していき、学習の最後に読書会をした。このように、国語科と他教科他領域を関連付けて学習することで、子どもたちにとってよりねらいに迫りやすくなり、そこでの経験やつけた力が、さらに様々な場面につながって生かされていくことを願っている。

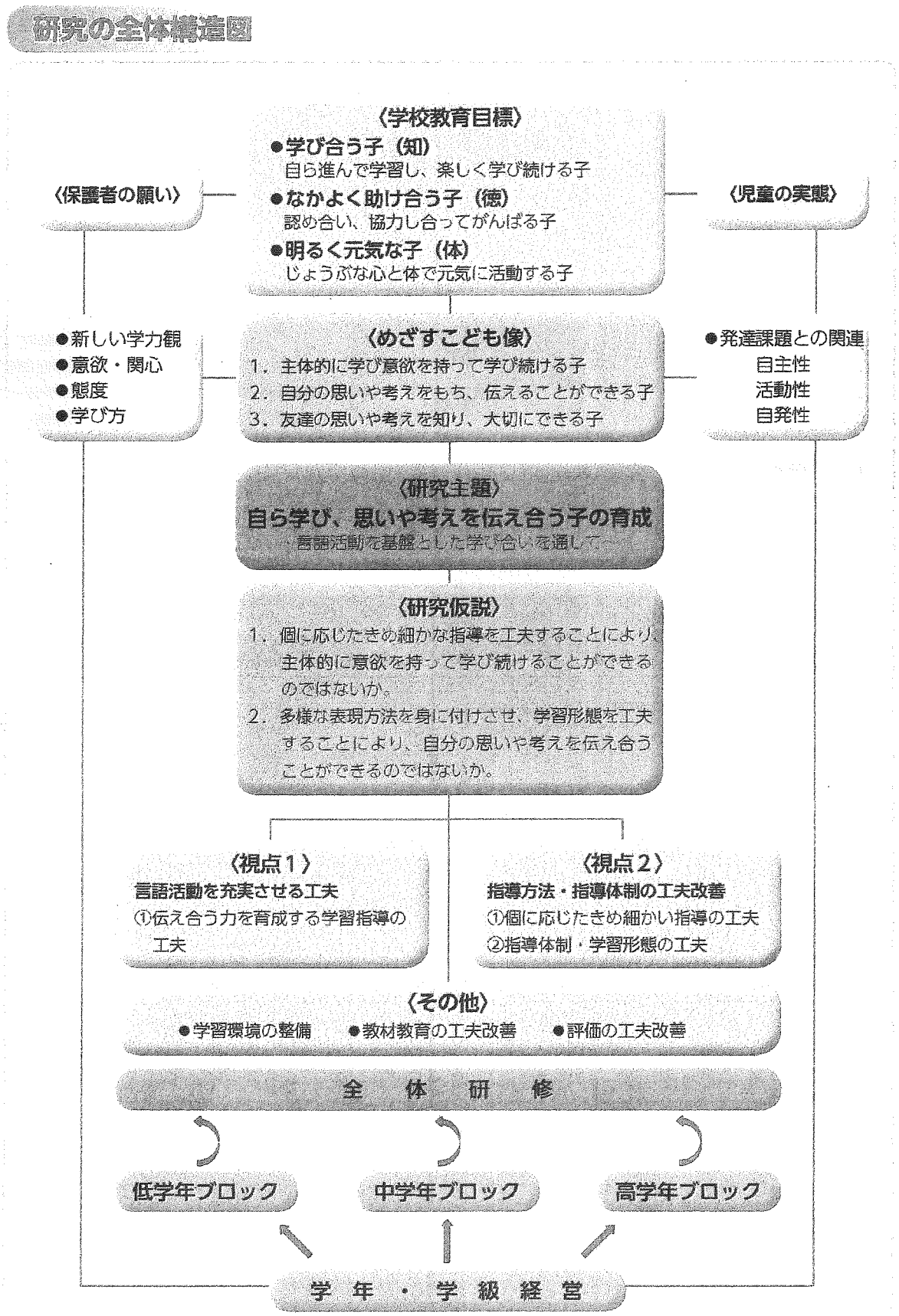


視点２は、「指導方法・指導体制の工夫改善」。①として「個に応じたきめ細かな指導の工夫」をあげている。上記に、６年生の指導案を例にあげた。本時の展開の中に児童の実態にあわせて、一人一人に自分なりの考えを持たせたり、発表し伝え合う場面を設定したりしている。じっくりと自分の考えをもった上で、友達と交流することにより改めて自分の考えを確認したりほかの考えを知ったりと課題について深めていくことをねらっている。また、全体への支援の他、留意点の箇所に「本時の活動で、特に支援が必要な児童についての教師の支援」を記入することにしている。これにより、どの子もそれぞれの力にあわせ課題に迫ることができるよう配慮している。

②としては、「指導体制・学習形態の工夫」をあげている。発達段階や活動内容・目標により、一斉・グループ・ペア・コース別学習など、交流の人数や場について、吟味して取り組むよう心がけている。

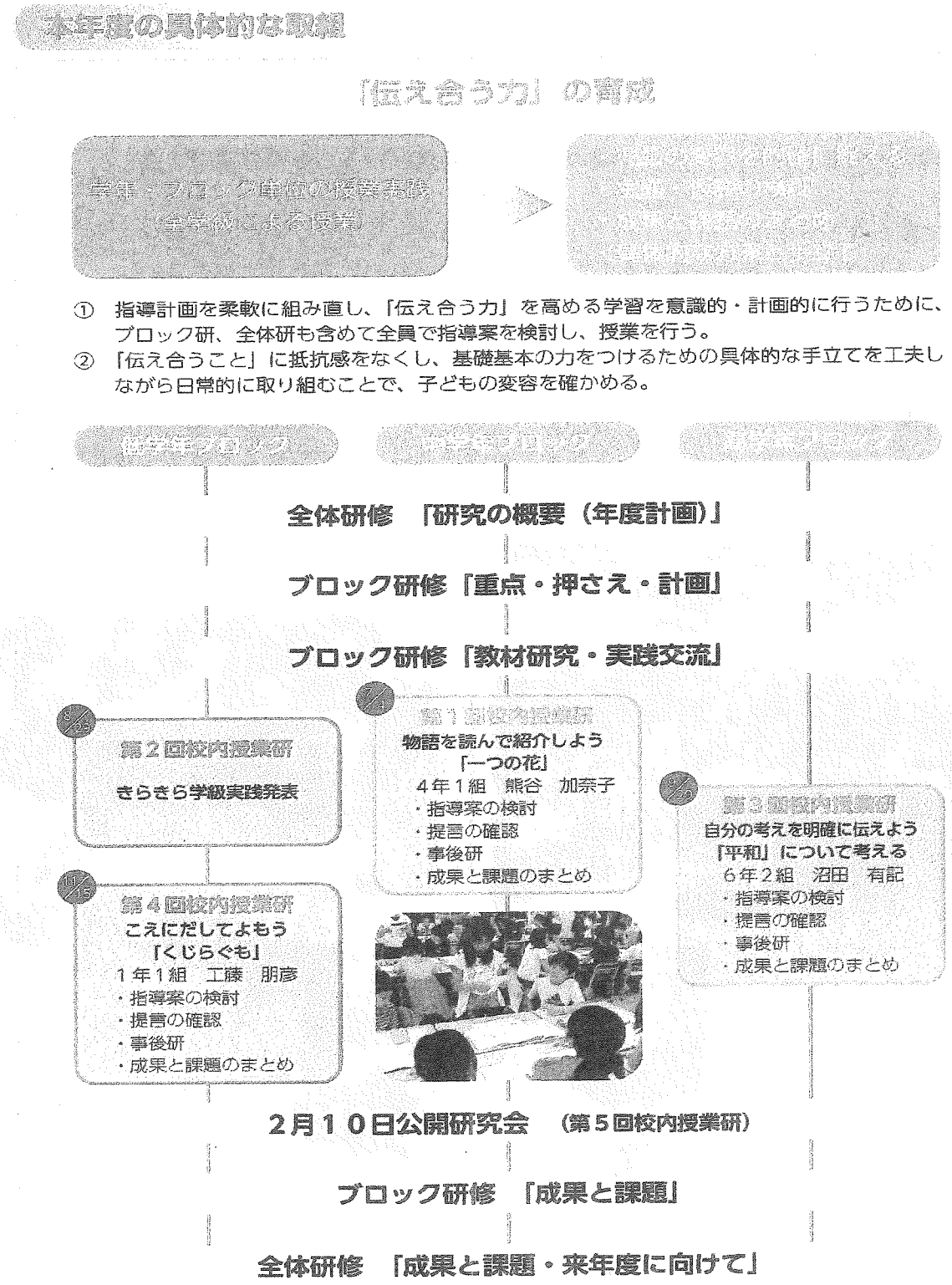
研究の全体構造図

今まで、説明してきた研究主題や内容について、下記のように全体構造図として表した。



本年度の具体的な取組

今年度は、「伝え合う力の育成」に特に力を入れて進めてまいりました。学年・ブロック単位での授業実践を通して、児童の実態や変容を的確に捉えながら主題と仮説の検証に努めてきた。全体研修による概要についての話し合いに始まり、それを受けてのブロックによる「重点・押さえ・計画」の決定、さらに新しくなった教科書の教材研究や指導案検討・実践交流・校内研授業での成果と課題のまとめを行ってきた。



成果と課題

＜成果＞

視点１に関って

・ 発達段階や学級の実態に合わせ、学習のきまりを身につけたり交流の仕方を確認したりすることが大切であることがわかった。
・ 書かせることが、話し合いを深めるために大変有効であることが確認できた
・ 何のための手立てや活動かを明確に提示することが伝え合う力を育てるために大切だと知った。

視点２に関って

・ 言語活動を単元の中で位置づけ、ワークシートや掲示物で見通しを持たせることができた。
・板書、ワークシートの工夫は、どの子にとっても目標達成のための手立てとなる。
・ 発達段階や目標に応じて、人数や場の工夫が必要だということが確認できた。

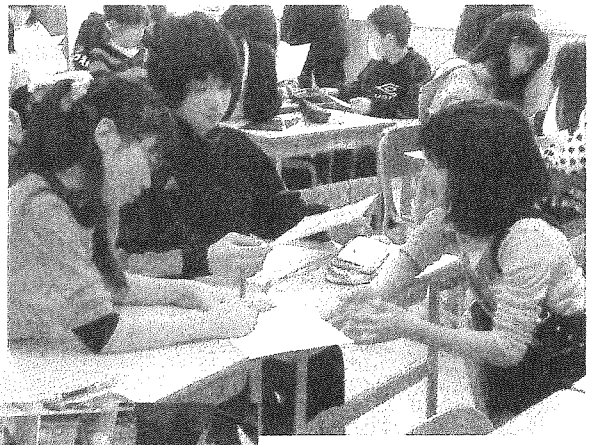
＜課題＞

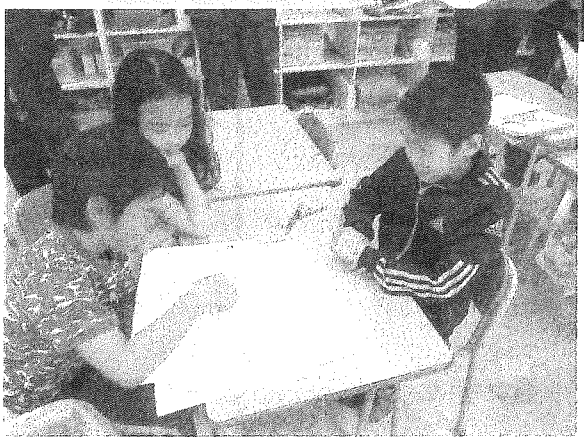
視点１に関って

・ 特に力をつけていく部分を焦点化したり使いやすいものにしたりするとよい。
・ 交流の際のアドバイス、聞き方の押さえを確認し指導をしっかりとしなければ間違えの指摘や個人の発表で終わってしまう。
・ 系統性を持った学習のきまりや交流の仕方の確認が必要だと感じた。

視点２に関って

・ 自分の考えを持たせそれを生かして話すということ→底上げできるよう工夫が必要。
・ 系統性を持たせた掲示物など、全校で共通確認できると更なる効果が期待できる。





（2）　室蘭市立本輪西小学校

【研究主題】　生き生きと活動に取り組み、思いを表現できる子どもの育成
～　言語活動を重視した授業を通して　～

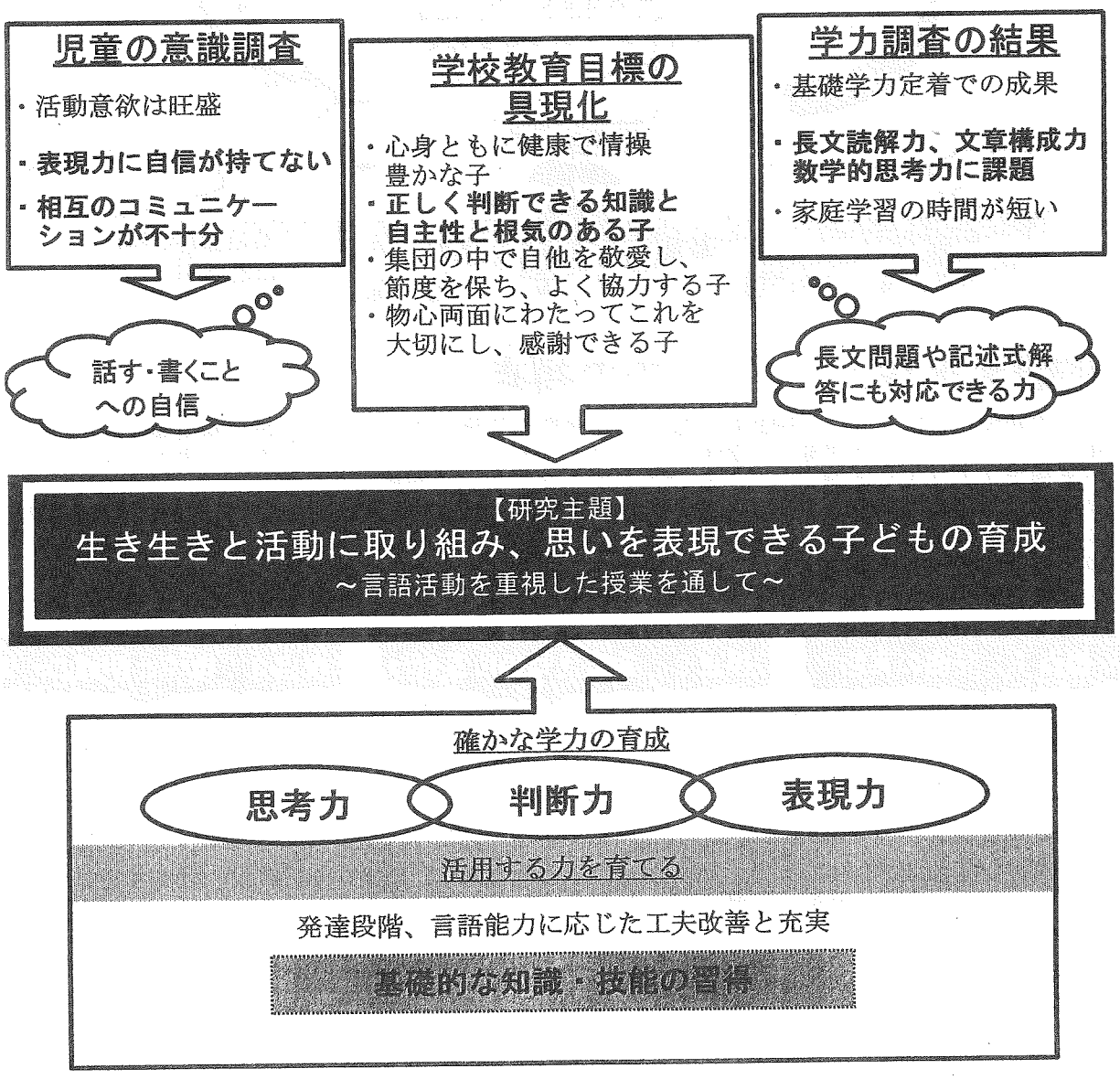
Ⅰ．主題設定について

本校においては、４年前から「児童の意識調査」により、学習・他とのかかわり・体力について、自己評価を実施している。その結果から、本校は全学年共通して「話す・書く」などの表現活動に苦手意識をもつ児童が多い傾向にあることが把握できた。

また、基礎・基本の確実な習得を目指し、始業前の１５分間をトレーニングタイムと位置づけて全学級で漢字や計算練習・朝読書を中心とした取組を進めてきた結果、全国学力・学習状況調査や標準学力調査による標準化得点の経年比較では、基礎的な内容で一定の成果は見られた。一方で、国語科では「書くこと」に関する設問（長文読解力、文章構成力）、算数科では「記述」で解答する設問（数学的思考力）の正答率の低さが思うように改善されていないことが明らかとなった。

生活習慣調査では、家庭での学習時間が極端に少ない児童が多く、宿題として学習することは定着してきているものの、自分で課題を見つけ進んで取り組む自主学習としての家庭学習には至っていない状況も明らかになった。

そこで、本校ではこれらの児童の実態をもとに、今年度から３ヶ年計画で「基礎的な知識・技能の習得」を土台とし、それを「活用」する力を育てるため、さらに「確かな学力」を育成する思考力・判断力・表現力等を身に付けるためには、基盤となる言語活動の充実を図り、児童の発達の段階や言語能力に応じた指導計画や指導方法の工夫改善が必要であると考え、本研究主題を設定した。



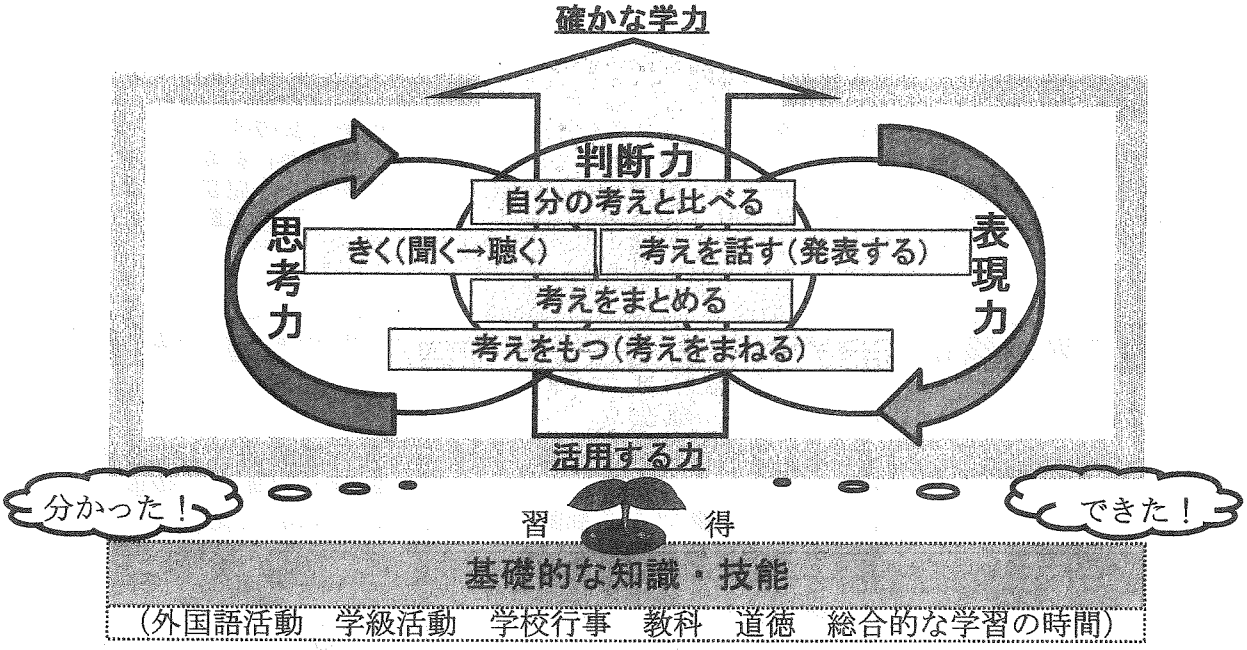
Ⅱ．主題へのアプローチ

ねらい

各教科および学校生活全般において習得した基礎的な知識・技能を土台とし、活用する力を高め、より確かな学力を育成するためには、思考、判断、表現していく場面を学習過程の中に適切に位置付けることが必要である。

また、児童一人一人が“思いを表現できる”ようになるためには、伝える（表現する）技能を身に付けるとともに、「こう考えた」「ここまでできた」という満足感や達成感を味わったり、「同じ考えの友達はいるかな」「友達はどう考えたのかな」と学び合う楽しさを味わったりすることも重要である。

本校では、児童一人一人が自分の考えをもち、まとめ、互いに話したり聞いたりする言語活動を通して、自分の考えを振り返ったり深めたりするとともに、互いに伝え合うことを繰り返す中で確かな学力を身に付けさせていきたいと考える。



研究仮説とアプローチの視点

研究主題設定にあたり、**『国語科をはじめ各教科の指導計画の中で、言語活動を適切に位置づけた指導を行うことにより、児童の言語能力を高め、活用する力を向上させ、様々な取組を通して自分の思いを表現する子どもを育てることができるだろう』**という仮説を立てた。

言語活動の中でも、特に「話すこと」「書くこと」にかかわり、どの単元でどのような言語活動に重点を置いて計画するのか、その中で自分の思いや考えをどう話したり書き表したりさせるのか等、指導内容や方法を工夫改善することで主題に迫ることができると考えた。

仮説を立証するために、本校では以下３つの視点を設け、取り組むこととした。

視点１：児童の実態	視点２：言語活動の位置付け	視点３：指導と評価の一体化
目の前の児童一人一人の姿と成長を見つめる	思考力・判断力・表現力を身に付けさせるために必要な言語能力を明確にする	単元や単位時間の指導計画の工夫改善

言語活動による学びの楽しさは、一人ひとりが自分で考え、間違いを恐れずに意見を交わし、共に学び合うことや、自分の経験や知識を基に考えることにあるだろう。

児童の実態や個人差に応じながら、それぞれが集中して取り組んだり、今までと比較してみたりすることで、話すことができた、書くことができたという満足感を味わいながら表現する力を身に付けられるよう、言語活動を計画的に適切に取り入れていきたい。

年次計画

１年目	**【言語活動を取り入れる】** 児童が「伝えたい」「交流したい」と思うような楽しい言語活動を、また、集中して取り組むことのできる、現状より少しステップアップした言語活動を取り入れる。取り入れた言語活動と評価を結びつけ、次年度へとつなげていく。
２年目	**【言語活動を深める】** １年目の取り組みから、より明確になった課題を焦点化し言語活動を深めていけるような具体性を出していく。併せて評価とその手立てについても深めていく。
３年目	**【言語活動を充実させる】** 言語活動の充実を図るために、指導（的確な目標、的確な児童の実態把握、的確な指導）と評価の一体化を図る。

本校の研究は、３ヶ年計画で「言語活動の充実」を通して活用する力を育成することを目指し、今年度はその１年次で、話し方･聞き方の基本的なパターンを身に付けさせ、表現する事の楽しさを実感することができるような言語活動を授業の中に取り入れることとした。

その際、児童の実態をもとに現状よりも少しステップアップした言語活動を、どの場面でどのように取り入れるか、また、一人一人が自分の考えをもち、自分の思いを伝えたい、聴いてもらいたい、また、友達はどう考えているのかなと比較したり、思考を深めたりすることができるような言語活動の展開や場面を意図的に設定した。

次年度以降は、今年度の取り組みを通してより明確になった課題に焦点を当て、言語活動を深めていきたい。併せて、指導とその手立て、評価基準の設定についても深め、３年次には、児童の実態や発達段階、言語能力に応じた指導とその評価の一体化を図る、充実年としていきたい。

Ⅲ　研究の全体構造

【学校の教育目標】

- ○　心身ともに健康で情操豊かな子
- ○　正しく判断できる知識と自主性と根気のある子
- ○　集団の中で自他を敬愛し、節度を保ちよく協力する子
- ○　物心両面にわたってこれを大切にし、感謝できる子

【研究主題】

生き生きと活動に取り組み、思いを表現できる子どもの育成

～言語活動を重視した授業を通して～

【研究仮説】

指導計画の中に言語活動を適切に位置付けた指導をすることにより、児童の言語能力を高め、「活用」する力が向上し、自分の思いを表現できる子どもを育てることができるだろう。

視点１：児童の実態	視点２：言語活動の位置付け	視点３：指導と評価の一体化
《研究内容１》 ・児童の意識調査の分析 ・学級経営の交流 ・「学びの姿」の共有化	《研究内容２》 ・意見発表、意見交流場面の工夫の在り方 ・思考過程を整理するためのワークシートの活用 ・特別支援学級での発達段階に応じた言語活動	《研究内容３》 ・言語活動に焦点を当てた評価規準と具体的な支援を位置付けた評価基準の設定

Ⅳ　研究の概要

視点１:児童の実態からのアプローチ

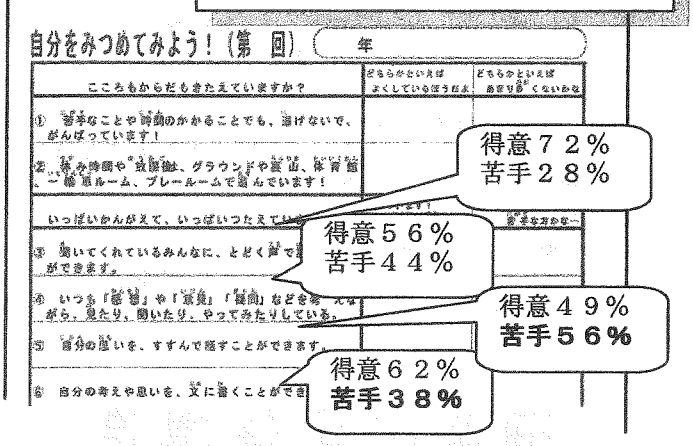
研究主題を解明し、学校の教育目標を達成するためには、児童の実態を把握し、目の前の児童一人一人の姿と成長を見つめることが大切である。本校では、「児童の意識調査」を実施するとともに、定期的に「学級経営交流会」を開催し、児童一人一人の生活や学習状況を交流するなど、全教職員で児童の実態把握に努めている。

①児童の意識調査の分析

調査は、内容を４分野１５項目で構成し、児童一人一人の自己評価としている。調査項目は、学校生活での日常的な目標として、児童の意識付けを図っている。また、分析結果を実践に生かすことができるよう、年３回（学期末）定期的に実施している。

「いっぱいかんがえて、いっぱいつたえていますか？」の「話す」「書く」の項目においては、苦手意識をもつ児童が多いことが明らかになった。これは「全国学力・学習状況調査」や「標準学力調査」の分析結果と一致する。このようなことから「話す」「書く」ことに対する抵抗感を軽減し、「表現活動」を活発にすることにより「基礎・基本」の確実な定着を図り「活用」する力を高めることとした。

平成２２年３月結果　児童数１４４名



②学級経営の交流

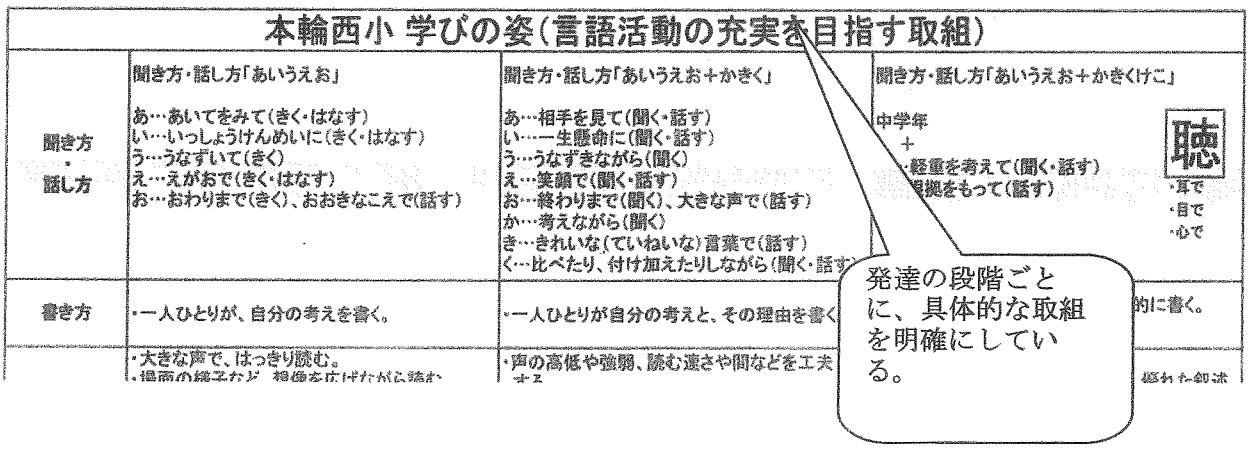
児童の実態や学級の様子を共有する場として、「学級経営交流会」を開催している。

「学級経営交流会」は、各学級担任の工夫や特色ある取組、児童の成長や変容などを共有し、指導に生かしていくことをねらいとして年３回（学期始め）開催している。

「学級経営交流会」では、学級づくりの大きな課題として、「漢字や計算を中心とした基礎・基本の定着」と「話すこと・聞くことにかかわる学習ルールの徹底」の２点が明確となった。「基礎・基本」の定着は、トレーニングタイムや家庭学習、指導過程の工夫など、共通理解を図り、取組を進めてきたが、「学習ルールの徹底」は、各学級で取組に差が見られた。

③「学びの姿」の共有化

話し方や聞き方、言語活動にかかわる学習ルールの共通理解が必要なことから「学習ルール」の交流を行うとともに、児童の実態に応じた目標＝「学びの姿」を作成し、低・中・高学年の系統性を意識した指導に努めている。また、次頁の「系統表」から「言語活動」について全教職員で共通理解を図り、指導を行うこととし、その都度「系統表」の改善を行っている。



本輪西小 学びの姿（言語活動の充実を目指す取組）

聞き方・話し方	聞き方・話し方「あいうえお」 あ…あいてをみて(きく・はなす) い…いっしょうけんめいに(きく・はなす) う…うなずいて(きく) え…えがおで(きく・はなす) お…おわりまで(きく)、おおきなこえで(話す)	聞き方・話し方「あいうえお＋かきく」 あ…相手を見て(聞く・話す) い…一生懸命に(聞く・話す) う…うなずきながら(聞く) え…笑顔で(聞く・話す) お…終わりまで(聞く)、大きな声で(話す) か…考えながら(聞く) き…きれいな(ていねいな)言葉で(話す) く…比べたり、付け加えたりしながら(聞く・話す)	聞き方・話し方「あいうえお＋かきくけこ」 中学年 ＋ ・軽重を考えて(聞く・話す) ・根拠をもって(話す) 聴 ・耳で ・目で ・心で
書き方	・一人ひとりが、自分の考えを書く。	・一人ひとりが自分の考えと、その理由を書く	的に書く。
	・大きな声で、はっきり読む。 ・場面の様子など、相手を広げながら読む	・声の高低や強弱、読む速さや間などを工夫する	場れを創造

発達の段階ごとに、具体的な取組を明確にしている。

本輪西小 学びの姿（系統表）

内容		低学年	中学年	高学年
話すこと	発音・発声	・姿勢・口形に注意し、正しい発音で話すことができる。 ・はっきりした声で、話しの終わりまでしっかり話すことができる。	・その場の状況や目的などに応じた適切な音量や速さで話すことができる。	・その自 … 速さを、
	話すこと	・事柄の順序などを考えながら、相手に分かるように話すことができる。	・自分の考えが分かるように、筋道を立てて適切な言葉遣いで話すことができる。 ・話す内容を選んで中心がずれないようにして話すことができる。	・自ら で … なが が
	話し合うこと	・身近な事柄について、話題に沿って話し合うことができる。 ・自分の言いたいことを相手に伝えることができる。	・互いの考え方の相違点や共通点を考えながら、進んで話し合うことができる。 ・相手の意見や考えを大事にしながら話し合うことができる。	・自 話 ・互 … 画的に できる。

各担任の判断で、指導していた付けさせたい言語能力を系統的に示すことで、低⇒高の発達を見通した指導計画が

教室に「話し方・聞き方」の約束を見やすく掲示するなど、各担任の取組にも一貫性が持てるようになった。

視点２：言語活動の位置づけからのアプローチ

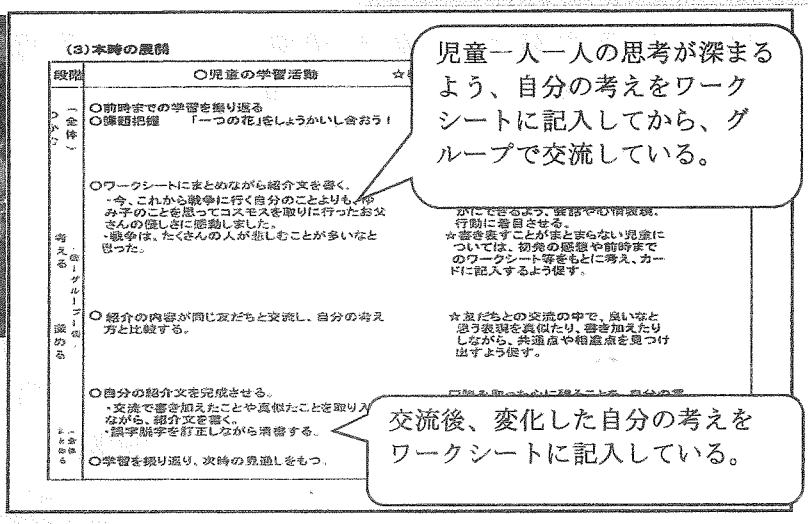
本校では、児童が自分の考えや思いを相手に伝えるための表現の技能を身に付けられるよう、単元の指導計画や本時の展開の中で、「言語活動」を位置づける場面を工夫し、「活用」する力を高めることができるよう、児童に身に付けさせたい言語能力を明確にし、場面に応じた適切な表現を指導するなど、具体的な手立てを講じている。

①意見発表、意見交流場面の工夫の在り方

教師から児童への一方的な発問や指示が多い授業とならないよう、児童がお互いに意見を表し合ったり、少人数で交流し合ったりする場面を指導過程に位置付けている。

第４学年　国語科
「物語を読んでしょうかいしよう」
（光村図書）本時案

友達に聞いてもらうことが、意欲につながり、積極的に交流する姿が見られるようになった。



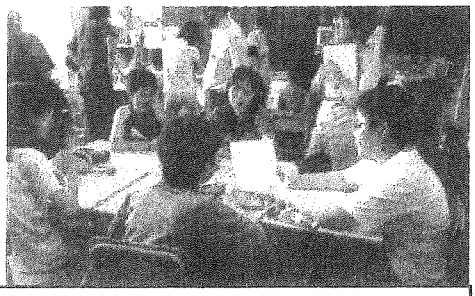
(3)本時の展開

段階	○児童の学習活動	☆
（全体） つかむ	○前時までの学習を振り返る ○課題把握　「一つの花」をしょうかいし合おう！	
考える （グループ内） 読める	○ワークシートにまとめながら紹介文を書く。 ・今、これから戦争に行く自分のことよりも、ゆみ子のことを思ってコスモスを取りに行ったお父さんの優しさに感動しました。 ・戦争は、たくさんの人が悲しむことが多いなと思った。	☆書き表すことがまとまらない児童については、初発の感想や前時までのワークシート等をもとに考え、カードに記入するよう促す。
	○紹介の内容が同じ友だちと交流し、自分の考え方と比較する。	☆友だちとの交流の中で、良いなと思う表現を真似たり、書き加えたりしながら、共通点や相違点を見つけ出すよう促す。
（全体） まとめる	○自分の紹介文を完成させる。 ・交流で書き加えたことや真似たことを取り入れながら、紹介文を書く。 ・漢字熟字を訂正しながら清書する。 ○学習を振り返り、次時の見通しをもつ。	

児童一人一人の思考が深まるよう、自分の考えをワークシートに記入してから、グループで交流している。

交流後、変化した自分の考えをワークシートに記入している。

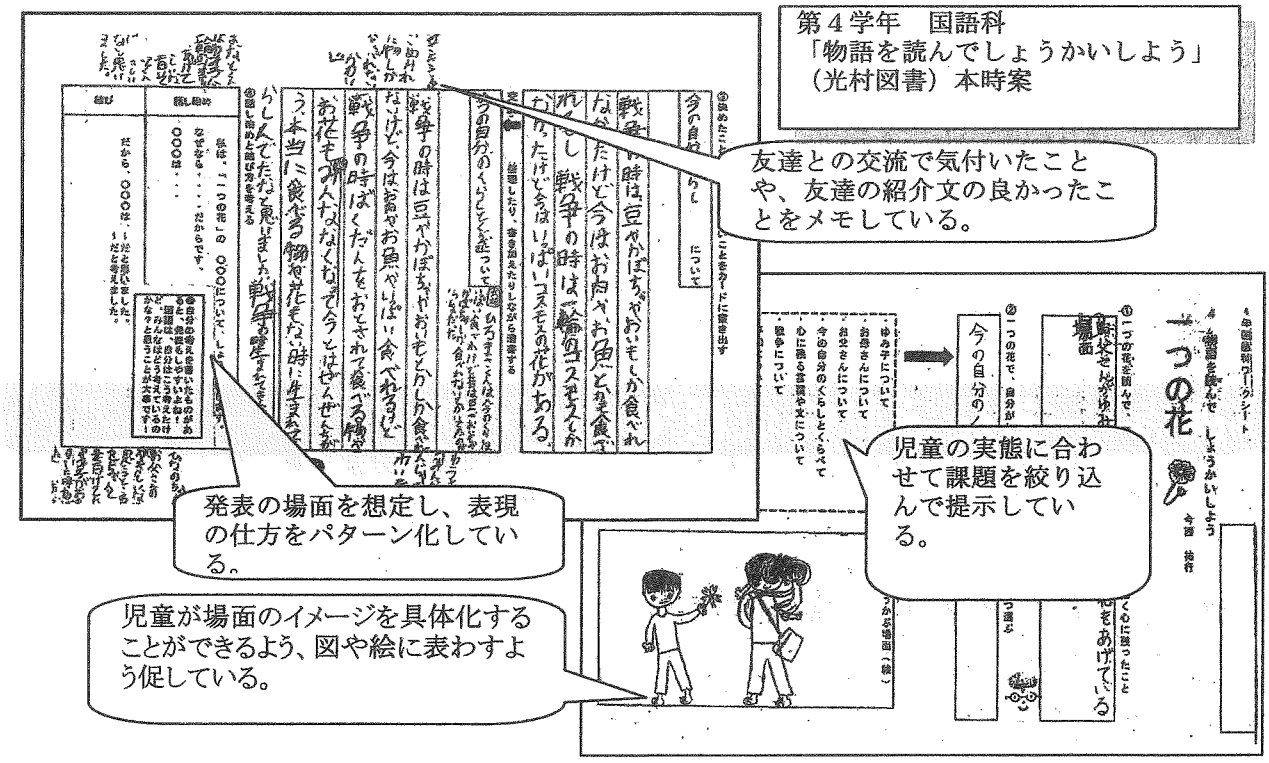
「お話のさくしゃになろう」（２年生　国語科）
友達の書いたお話に感想を伝えている。



「町のよさを伝えるパンフレット」
（６年生　国語科）表現の工夫を交流し合っている。

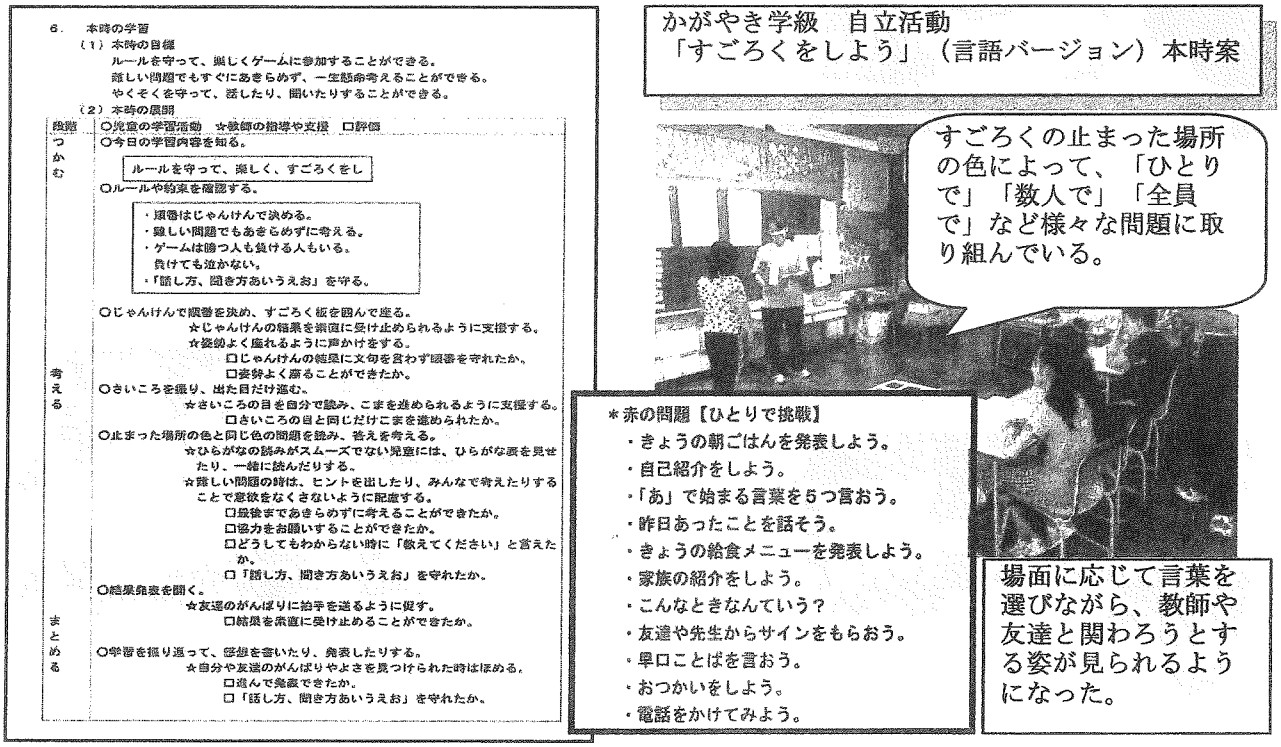
②思考過程を整理するためのワークシートの活用

児童が自分の発想や思いを言葉や図に置き換える作業には、順序だてて思考を積み重ねていくことが必要になる。そこで、児童一人一人が課題を明確にするとともに、手順を踏まえながら思考過程を整理し、表現の仕方を工夫することができるよう、ワークシートを効果的に活用している。



③特別支援学級での発達段階に応じた言語活動

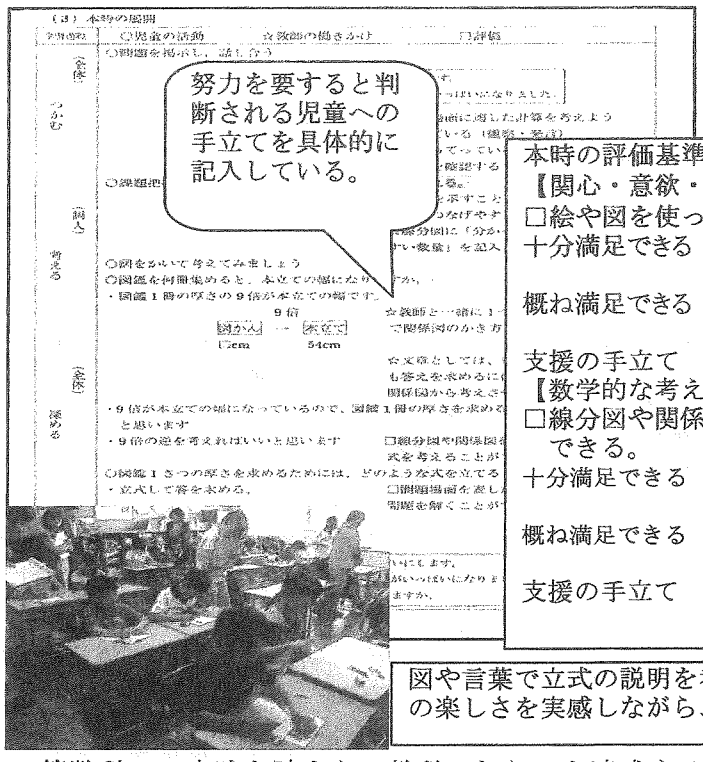
児童一人一人が障害の特性に応じて、集団行動やセルフコントロール、社会認知、生活のマナーなどを身に付けることができるよう、本校では、「ソーシャルスキルトレーニング」を意図的、継続的に指導している。



視点３：指導と評価の一体化をめざす取組からのアプローチ

児童一人一人が基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得し、それを活用するためには、年間や単元の指導計画の評価と改善を計画的に行うことが大切である。

本校では、児童の発達の段階や実態を踏まえ、「指導と評価の一体化」を図り、単元や単位時時間の指導計画の工夫改善に努めている。

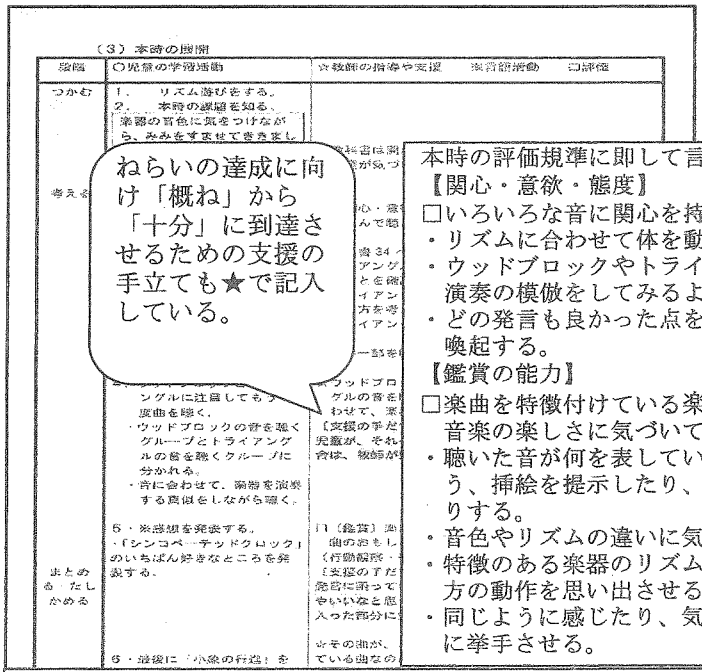


第３学年　算数科
「かくれた数はいくつ？」
（啓林館）本時案

本時の評価基準
【関心・意欲・態度】
□絵や図を使って意欲的に問題解決にあたろうとする。
十分満足できる　関係図などを使って問題をとらえ、乗法や除法を活用して問題を解決しようとしている。
概ね満足できる　関係図などを使って問題の数量の関係をとらえようとしている。
支援の手立て　挿絵をもとに具体的な場面を想起させる。
【数学的な考え方】
□線分図や関係図を用いて数量の関係や式をとらえることができる。
十分満足できる　関係図を使って問題の数量関係をとらえたり、解決の仕方を説明したりしている。
概ね満足できる　関係図を使って問題の数量関係をとらえ、問題の解決の仕方を考えている。
支援の手立て　図鑑の厚さと本立ての幅の関係を図に表わす手助けをする。

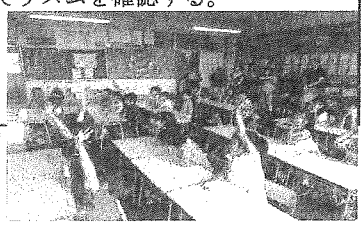
図や言葉で立式の説明を考え、発表することで、数学的に考えることの楽しさを実感しながら、活動していた。（３年生）

算数科での実践を踏まえ、教科のねらいを達成するためには、単位時間の指導計画の中で、より具体的な支援の手立てを明確にする必要があると考えた。そこで、音楽科の実践では、評価基準に達するための具体的な支援の手立てを、言語活動を重視する視点で指導計画に位置づけた。



第１学年　音楽科
「いろいろなおとにしたしもう」
（教育芸術社）　本時案

本時の評価規準に即して言語活動を重視した具体的な支援の手立て
【関心・意欲・態度】
□いろいろな音に関心を持って聴く学習にすすんで取り組もうとしている。
・リズムに合わせて体を動かしている児童をほめる。
・ウッドブロックやトライアングルの実際の音色を聞かせ、楽曲に合わせて演奏の模倣をしてみるよう促す。
・どの発言も良かった点を認めたり、板書したりするなど、発表への意欲を喚起する。
【鑑賞の能力】
□楽曲を特徴付けている楽器の音に注目しながら聴き、それらが生み出す音楽の楽しさに気づいて聴いている。
・聴いた音が何を表しているのか、どんな様子を表しているのか気づくよう、挿絵を提示したり、ウッドブロックやトライアングルの実物を見せたりする。
・音色やリズムの違いに気づくよう、手拍子でリズムを確認する。
・特徴のある楽器のリズム、音色、演奏の仕方の動作を思い出させることで発言を促す。
・同じように感じたり、気づいたりした児童に挙手させる。



曲を聴いて、気づいたことを発表する中で、友達の発言に触発されるように、次々と自分の気づきを発表するようになった。（１年生）

Ⅴ．成果と課題

本校の研究主題「思いを表現できる子どもの育成」にかかわり、３ヶ年計画の１年次として、児童が間違いを恐れずに安心して話し、自分の考えを「伝えたい」と思えるような、環境づくりと言語活動を取り入れてきた。

今年度の日常的な取組と、校内授業研究会、１３０周年記念公開記念研究会から、言語活動を重視した授業づくりを通しての成果と次年度以降の課題は以下の通りである。

視点１ 児童の実態 目の前の児童一人一人の姿と成長を見つめる	成果	課題
	○児童の実態をもとに、発達段階に応じた児童に付けさせたい力を明らかにし、「学びの姿」として示すことで職員の共通理解が深まった。 ○意識調査の結果から、話す、書くなど表現することへの抵抗感がやや薄れてきた。児童の達成感や満足感を大切にした言語活動の取組の成果と考えられる。	○集団の中で話すことに対しては、まだ抵抗感を持つ児童が多いことから、今後も児童相互の好ましい人間関係づくりや、間違いを恐れずに安心して話すことができる学級づくりに取り組む必要がある。

視点２ 言語活動の位置付け 思考力・判断力・表現力を身に付けさせるために必要な言語能力を明確にする	成果	課題
	○思考を整理するためのワークシートを活用することで、自分の考えを図示したりまとめたりできるようになってきた。 ○自分の思いを伝え合う場面を意図的に位置づけることにより、交流を通して、思考を深めさせることができた。	○国語で培うべき基礎的な言語能力をどのように付けさせ、各教科や他の領域でどのように活用させるのか、指導計画や指導案の中で明らかにする必要がある。 ○児童が苦手とする「聞く」「話す」「書く」力を高めていくことができるよう、言語活動の内容を明確にし、授業研究を行い、検証する必要がある。

視点３ 指導と評価の一体化 単元や単位時間の指導計画の工夫改善	成果	課題
	○単元や単位時間の評価規準をもとに評価基準を設定し、具体的な支援の手立てを講じることにより、指導のねらいによりせまることができた。	○国語以外の教科では評価規準と言語活動との関わりを明確にできなかった。次年度は、より児童の実態に即した評価基準の設定と効果的な支援の手立てを持って指導に生かせるようさらに工夫改善していく必要がある。

2　パイロットスクール事業に関わる研究指定校

（1）　室蘭市立大　沢小学校

【研究主題】　　響き合う学びの創造
～「確かな力」を育てる「豊かなかかわり」を通して　～

研究主題　「響き合う学びの創造」
～「確かな力」を育てる「豊かなかかわり」を通して～

◆研究主題の設定

児童の実態から

本校は小規模の学校であり、幼いころからお互いを良く知っているために、自分の意思を言葉によってはっきりと相手に伝えることが十分ではないという課題があった。そこで平成22年度より研修の方向性を「響き合う学び」へと舵を切り、授業や様々な活動の場で進んで自分の思いや考えを表出し、伝えあおうとする子どもたちの姿を求めていくこととした。

穏やかな環境の中で素直に育ってはいるが、異なった環境や大きな世界の中では持っている力を十分に発揮できるのだろうかという教師側からの疑問。オリジナリティを発揮して新しいものや高いレベルへ挑戦する気持ちが欠ける傾向があるという課題。これらは学校全体の「響き合う学び」の中で学ぶことによって解決し、更には「生きる力」の獲得、目指す子ども像へとつながっていくのではないかと考えた。

今日的な課題から

平成23年度から新しい学習指導要領に基づく教育内容がスタートし、子どもたちの「生きる力」を育むことを目指した理念はさらに次の段階へと進むことになった。新学習指導要領で求められているものは「確かな学力」を基盤とした「生きる力」の育成であり、その「確かな学力」を支えるものとして「言葉の力」が重視されている。

また、基礎的・基本的な知識及び技能の習得だけを目的とするのではなく、習得された力の定着を図り、定着した力を自分の物としていくということが求められているのである。

子どもたちには確かな力を身につけ、ただ単に与えられた課題のみを解決するだけではなく、自らの生活の中から課題を見つけ、解決していく主体的な学び手となることが求められてきているのである。

教育目標から

本校の教育目標、目指す子ども像として設定されているものは次の四つである。研究主題の求める子ども像は本校の学校目標と合致する。

「意欲をもち、粘り強く実践する子どもの育成」

- じょうぶな子ども
- よく考える子ども
- やりぬく子ども
- はげまし合う子ども

「響き合う学び」を生み出すための研究の柱

研究内容 1
全学級公開の
授業研究の推進

- 「豊かなかかわり」を生み出す指導過程
- 共同的な学び（ペア・小グループ学習）の導入
- 「聴く」「つなぐ」「もどす」教師の支援
- 「学ぶ意味」を高める教材の開発・教材研究

研究内容 2
個人テーマによる研究の推進

- 研究主題からの発展的な個人テーマの設定
- 研究主題からの焦点化した個人テーマの設定
- 個人テーマに沿った単元構成
- 個人テーマに沿った授業案づくり
- 個人テーマに沿った学級経営

研究内容 3
思考力・判断力
表現力を高める
為の活動の推進

- 日常的な表現活動
- 全校の場での豊かなかかわりの位置づけ
- 全教育活動における思考力・判断力・表現力を高める活動の位置づけ

大沢小学校の
研究全体構想

学校教育目標　【意欲を持ち、粘り強く実践する子どもの育成】

- じょうぶな子ども　・よく考える子ども
- やりぬく子ども　・はげまし合う子ども

生きる力

研究主題　『響き合う学びの創造』
～「確かな力」を育てる「豊かなかかわり」を通して～

（仮説） 授業の中に「豊かなかかわり」を生み出すことによって「確かな力」が身につき、「響き合う学び」が創造される。「響き合う学び」の中で学ぶことは「生きる力」の獲得へとつながっていく。

研究内容 1
授業研究

研究内容 2
個人テーマ

研究内容 3
思考力・判断力・表現力を高める活動の推進

学年・学級経営

「豊かなかかわり」を生み出す指導過程

①学習材との出会い

びっくり!
わくわく!

やってみたい
何だろう?

一時間の授業の始まりや、単元の導入部分で、児童の既成概念を打ち破るような学習材との出会いを用意する。児童の興味や関心を高められるような教材の開発及び、教材や学習内容の効果的な提示の仕方を工夫する。(個人・共同・全体)

・読み聞かせを聞く　・キャラクターからの手紙　・音読
・パズルの提示　・核になる言葉を探す　・目標の確認等

②自分の思いや考えを持つ

調べる!
書く!　実験

こう思う
こうかな?

教材や学習内容との出会いのあとに、その教材や内容に向き合い、自分の思いや考えを持てるようにする。これは、授業の中で展開される「豊かなかかわりのための自分のこだわりともいえるもので、自分の学びを支える要素である。(個人・共同)

・話し合い　・自分の願いを書く　・自分の考えを書く
・文章の色分け　・操作活動　・書き込み・問題を解く等

③学び合い・伝え合い

なるほど・・・
そうか!
そういう考え
もあるな・・・
同じだな

もう一度考え
てみよう・・
やっぱり

個々の児童の「自分の思いや考え」を学級集団に問いかけ、照らすことによってある時は自分の考えに自信を持ち、ある時は自分の考えに修正を迫られることになる。初めに持った自分の思いや考えが学び合いや伝え合いを通して深まることが「豊かなかかわり」を生み出す授業の核となる。

友だちや教師という他者と学び合い、伝え合うことで新しい思いや考えを持ち、教材に対する興味や関心が高まり、確かな力が身についていく。一人では決してできない学び、他者が存在しているからこそ成立する学びを「学び合い・伝え合い」としておさえる。　(共同・全体)

・チームごとの練習　・発表　・確認　・全体でのまとめ
・話し合い(ペア、全体)　・全体で考える　等

④確かな納得

できたぞ!
わかったぞ!

次はこうして
みよう

「確かな納得」とは「学び合い伝え合い」を通して深まったり、高まったりした学びを自分のものとして受け入れ、次の学習活動に生かしていくことである。「確かな納得」によって知識や技能を身につけ、思考力や判断力、表現力を身につけ関心や意欲を高め、次の学習へのモチベーションを高めていくことができる。(個人・共同・全体)

・発表　・話し合い　・音読　・絵を見ながら説明
・計算の確認　・感想のまとめ　・飾り作り　等

■研究の歩み

◆平成２２年度

月	日	学年・組	教科	授業者	単元名
５月	２７日	３年１組	算数	堀川　佳奈	たし算とひき算
	２８日	４年１組	体育	渕瀬　仁嗣	走・跳の運動 リレー・短距離走
７月	２日	たけのこ	生活単元	伊藤　隆夫	たなばた会をしよう
９月	１７日	２年１組	国語	浅井　貴久子	「きつねのおきゃくさま」
１０月	２８日	１年１組	国語	小倉　弥生	「はたらくじどう車」
	２９日	６年１組	算数	石川　雅之	ペンタゴンパズル
１１月	１８日	つくし	道徳	菅原　武	さかあがりできたよ
	１９日	５年１組	国語	津田　邦子	「大造じいさんとがん」

◆平成２３年度

□授業研究

月	日	学年・組	教科	授業者	単元名
６月	３０日	３年１組	算数	石川　雅之	買えますか買えませんか
７月	１日	６年１組	国語	津田　邦子	「カレーライス」
８月	２３日	たけのこ	自立活動	斉藤　史哉	宿泊学習に向けて
	２６日	２年１組	算数	渕瀬　仁嗣	かさ
	２６日	５年１組	算数	堀川　佳奈	合同な図形
９月	８日	２年１組	国語	吉澤　勇	あてっこ詩
	２０日	つくし	算数	菅原　武	わり算
	２８日	１年１組	算数	浅井　貴久子	おおきさくらべ
	３０日	４年１組	国語	小倉　弥生	「ごんぎつね」

□授業研修会

日時　：　８月２６日(金)

講師　：　東京家政大学・大学院教授　大越和孝氏

公開授業　：　国語科　６年１組　「伝統的な言語文化」

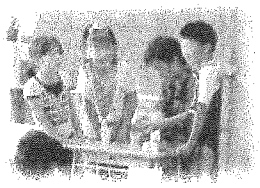
講演　　：「豊かなかかわり」を通して「確かな力」を育てるために

研究の成果

研究主題から

■研究を進めるにあたって何よりも大切なのは教師の意識の改革である。全教育活動、すべての授業の中で、子ども同士をつなげ、子どもと学習材とをつなげ、子どもと社会をつなげ、自分自身とつなげる。
その中でいかに「豊かなかかわり」を生み出すことができるか。また、どのような「豊かなかかわり」を生み出すことができるのか。個々のイメージをいかに具体的な実践につなげていくのか。まさに教師自らが「響き合う学び」の体現者として子どもと共にどう学び合っていくのか。その第一歩として研究主題を意識して授業実践が進められたのは大きな成果といえる。
■ 研修部からの提案によって多くの教師が「豊かなかかわり」について意識し、進むべき道筋へと歩み始めたことは大きな成果となった。

研究内容１
授業研究から



■全学級で授業を公開し、授業づくりから授業反省、授業の分析まで実施することができた成果は大きい。時間の確保が難しい中でそれぞれのブロックを中心に検討や検証ができたことはお互いの実践の交流や刺激となった。
■「豊かなかかわり」を生み出すためにはまず子どもたちが自分なりの思いや考えをしっかりと持っていなければならないことが明らかになった。
■ 授業の中に「豊かなかかわり」を意識的に作り出すことによって子どもたちの学びが変容し、「確かな力」として結びついてくる道筋が少しずつ見え始めて いる。
■4つの指導過程が示されたことで授業者だけでなく参観者の授業を見る視点が定まり、授業を検証することが可能になった。
■指導過程に教師も児童も慣れてくることで授業の流れをつかめるようになってきた。
■ 4つの段階をどのような手立てで成立させるか、学習形態はどうするか場の設定はどうするか、など様々な教師のねらいが教科の目標と絡み合って一つの授業を組み立てることを意識できるようになってきた。
■授業の中に「豊かなかかわり」を生み出す様々な手立てが蓄積され、日常の授業の中でも常に意識されるようになった。

研究内容２
個人テーマから

■研究の主題や副主題に各人が様々な角度から自分なりのアプローチをすることができるスタイルは、研修係からの提案ばかりではなく、自分から進んで研究を進めることができる大きなメリットがある。
■全職員が同じ方法で導き出す道筋と、自分なりの持ち味で導き出す道筋があることによって同じ方向を向きながらも多様な活動の展開が期待できる。これは研究をただの理論に押しとどめるのではなく、日常の実践として突き詰めていくための大きなけん引力となる。

研究内容３
思考力・判断力・表現力を高めるための活動の推進から

■学校行事をはじめとして児童会活動、集会等においても児童の変容が見られるようになってきている。授業の中だけでは十分に伸ばすことのできない力を全職員があらゆる機会をとらえて伸ばそうとする意識の変化が見られた。
■教育活動全般においてどのような働きかけが必要なのかそれぞれが模索しながら良い方向へ動き出している実感が出てきている。

研究の課題

◇「豊かなかかわり」が「確かな力」にどのように結びついていくのかという点について評価も含めて実践の場で検証していく必要がある。

◇実践研究によって明らかになった点について共通理解を図り、理論研究についても研究の出発点に立ち戻り共通の課題として深めていく必要がある。

◇今後研究が進むことによって手立てや場の設定、学習形態の工夫等様々な要因について検証をすることができるようになっていくだろう。同時に教科としての目標を達成するための教材研究、教材解釈、評価等についても同じように蓄積していくことが大切である。

◇研究内容1にかかわって授業研後の全体研修やブロック研修によって話し合われたことは研究実践からのフィードバックとして理論面にもいかしていくことが大切である。

◇研究内容2にかかわってはお互いの良さを交流できるような働きかけを積極的に進めていく必要がある。

◇研究内容3にかかわっては子どもたちの姿に大きな変容が見られるようになってきたが、はっきりとした手立てとして蓄積し今後は研究としてどう束ねていくのかということも意識していく必要がある。

（2）　室蘭市立本室蘭小学校

【研究主題】　生き生きと学び、豊かに伝え合う子の育成
～　表現する喜びを感じながら　～

1．研究主題

（研究主題）

生き生きと学び、豊かに伝え合う子の育成
～表現する喜びを感じながら～

（主題設定の理由）
わかることは楽しいことである。
子ども達は、わかることで喜びを感じ、自信をつけることができる。
そしてさらに、学習したこと、感じたことなどを発信していく中で
達成感も得ることができると考えられる。
そしてそれらの「自信」は、「自分を見つけること」
そして、「自分を高めること」へつながるであろう。
学習の基礎基本である事柄を身につけさせ、
その力を元に　豊かな表現を促す。それらのことにより、
〈生き生きと主体的に学び、わかる喜びを感じ、
コミュニケーションを豊かにとれる自立した子〉をめざし、
本研究主題を設定した。

「伝え合う力」とは
「伝え合う力」とは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり理解したりする力である。
（『学習指導要領解説　国語』）

「伝え合う力につながる5つの視点」
1.支持的風土を持つ集団・人間関係の形成
2.伝え合いたいという意欲の向上
3.伝える内容を相手に合わせて構成する力の獲得
4.伝える内容をもったり、伝えられた内容を理解する力の獲得
5.適した方法で話す・聞くなどの　スキルの獲得

本校がめざす子ども像

生き生きと学び、豊かに伝え合うとは
わかる喜びを感じ、自信がつくことで、「さらに学びたい」「話したい」という意欲が喚起される。
一人ひとりが思考をはたらかせ、それを深めたり広げたりしながら、
主体的にその子なりの思いや考えを自分の言葉で伝えたり語ったりする子どもの姿、
それを本校では、
「生き生きと学び、豊かに伝え合う」とおさえる。
そして、
表現する喜びを感じながら学習に取り組む子ども像をめざしていく。

2．研究仮説について

①本来　表現することは楽しいことである。
豊かな<言葉や話し方>を知り、表現する経験を重ねることで、自信をつけ、伝える力を身につけることができるのではないか。
②伝えるために必要な「考えること」を意識した学習をすることで、思考力がつき、学ぶ喜びを感じて、主体的に生き生きと学びを楽しむことができるようになるのではないか。
③自分の学習成果や考えを伝えることに意欲をもつことで、他者とのコミュニケーション力をつけ、伝え合い高めあうことができるのではないか。

仮説設定にあたって

仮説①～③については、「伝え合う力」につながる１～５に次のように対応している。
仮説①豊かな<言葉や話し方>を知る、経験を重ねる。→主に３・５に対応。
仮説②伝えるために必要な「考える事」で思考力がつく→主に２・３・４に対応。
仮説③伝えることに意欲をもつ、コミュニケーション力→主に１・２・５に対応

3．研究実践　～外国語活動の研修を通して～

これまでの経緯から

・２００７年度までの研修では、「進んで学習し、ともに高めあう子の育成」として、
～基礎基本の定着～について研究を行ってきた。
「読む力・書く力・計算する力の定着」を中心に、「話すことや聞くこと、進んで調べたり伝えたりする子」をめざし、取り組んできた。
その研究の過程で、児童一人一人のもつ　学びたいという意欲の向上、課題をとらえ　思考する力・表現力・コミュニケーション力の向上などの点が課題としてあげられてきた。
そこで、生き生き学ぶ・豊かに伝え合う・表現を喜びとして感じながらコミュニケーションを・・・・というキーワードをつないだ。
折しも、小学校での外国語活動が導入される時期と重なり、未知の世界である外国語活動への研修も含め、子どもたちのコミュニケーション力を豊かに育むことを目指し、研修主題を設定した。

〈研究の概要〉

２００８年度の研究

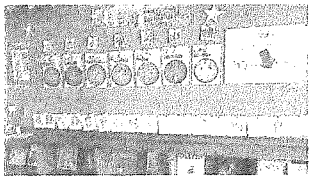
○研究の理論化　研究テーマ
○コミュニケーションを軸とする環境整備の一環として
・伝える力を向上させる方法に関しての研究
～国語科の基礎力　表現力話す力聞く力の向上にむけてのアプローチ
・外国語活動　　英語カリキュラム案作成

２００９年度の研究

○英語ルーム開設　環境整備
○英語ノート付属カードの整備　教材の整備
○ＡＬＴ活用
○外国語活動　実技研修　チャンツ・ゲーム研修

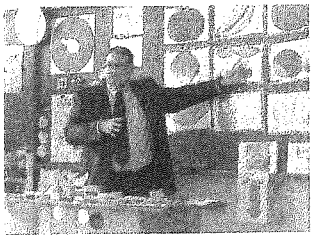
２０１０年度の研究

○ひき続き、外国語活動の授業研究を通しながら、研究テーマへのアプローチを行った。
外国語活動・１・２年　５時間　　３・４年　１０時間　　５・６年　３５時間　の外国語活動
○ＡＬＴの有効活動
○学級経営上のとりくみ検証
・伝えることを意識したコミュニケーション
・考えることを意識した学習の工夫



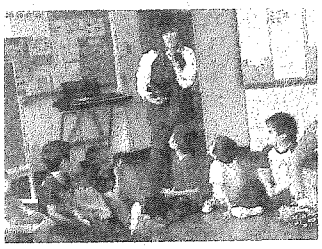
２０１１年度　今年度の研修

○10 月 27 日(木)　公開実践講習会実施　　講師：苫小牧駒澤大学准教授　ロバート先生
○11 月 25 日(金)　公開研究会実施　　3 年･6 年(5 年)の授業公開



①ブロックテーマ
今年度は、低・中・高ブロックを基本としながら、低中・高・特支として編成を柔軟にしながら、実践を重ねていくこととした。それぞれのブロックテーマは以下のように設定した。

★低学年ブロックテーマ



「楽しみながら、伝えよう」
○ことばにふれる!
○表現する経験を!
○夢中になれる楽しさを!

・低学年の実態から、楽しんで英語にふれるということを重視する。

★中学年ブロックテーマ

「進んで　伝え合おう！」
○聞いてふれよう！失敗を恐れず　声を出してみよう！
　　Let's challenge!
○自分はどう？どっち？　考えて選んだり、決めたり。
　　そして、ともだちは？

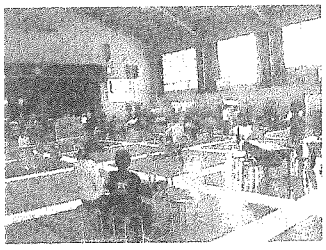
・この時期の子のノリをうまくいかして、はずかしがらず取り組む、楽しい授業作りを
・自分で考えて、判断したり、選んだりする場面をとりいれた授業作りを

★高学年ブロックテーマ

「自分の思いや考えを表現しよう」
○よく聞き考え、イメージをふくらませよう。
○コミュニケーションを楽しもう。

・「自分でとらえ、考える』場面の設定　。「よく聞き、イメージをとらえよう！！」
・間違えること　忘れること　未完成をおそれずに、楽しませる、親しませる、体感させる。
・そして、「自分」を表現しよう。　コミュニケーションの場面を工夫して設定。

★特別支援学級ブロックテーマ



「英語で　遊ぼう」
○遊びを通して英語に親しむ～楽しく

②今年度の外国語活動
☆外国語活動の担当
・1～4 年は、学級担任が主に行っている。ＡＬＴが入った授業を
　1・2 年は年間２～３回　　３・４年は　年間４・５回　予定している。
・支援学級は、昨年度までは協力学級での活動も行っていたが、今年度からは２つの支援学級合同で英語を取り入れた学習を計画している。ALT の授業も年間２回程度予定している。
・５・６年は、学級担任＋教務フリーのティームティーチングの形で進めている。
　おもに、授業の準備･計画・進行は、フリーが行い、２人体制で授業を行っている。
　ＡＬＴは月に１回程度予定して活用しており、時には３人体制で授業を行うこともある。
　５年は　ＴＴ研修担当者　　６年は教務担当者が　授業を進めてきた。

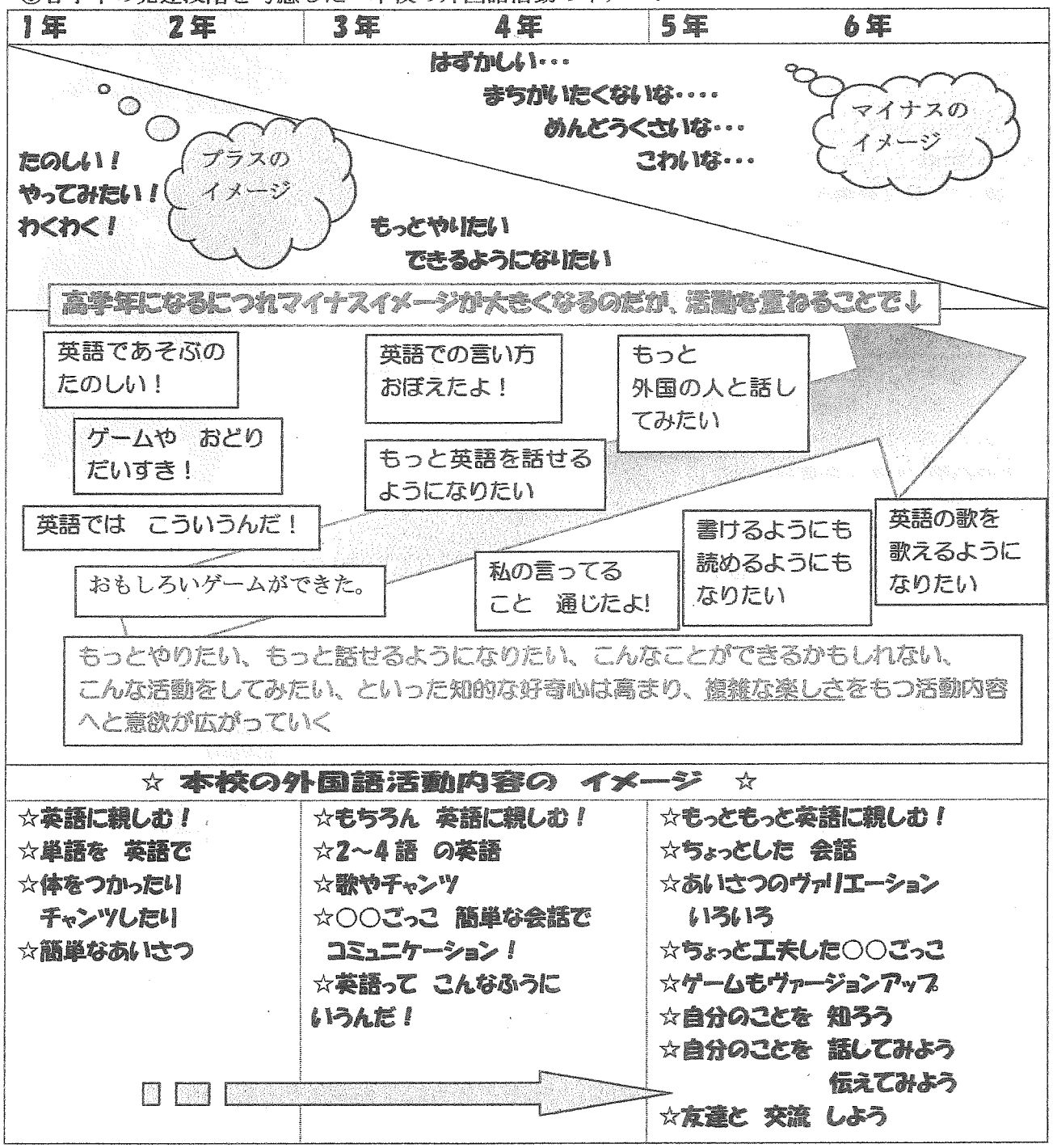
☆学習の環境

２００９年からイングリッシュルームを開設し、活用している。
各種カードや、電子黒板、ゲームに使用できるグッツの整備などがされている。

・１～２年は　おもに英語ルームを活用している。
・３～４年は　クラスルームを使うこともある。
・５～６年は　活動内容によって、英語ルーム・クラスルームを使い分けている。

いす・机の必要性や、電子黒板の必要性などを考慮、また動きのある活動がメインの場合には多目的ルームなどを活用するなど、活動に応じて柔軟に活用している。高学年でも広く活動できる、適切な広さのイングリッシュルームが、のぞまれるところではある。

③各学年の発達段階を考慮した　本校の外国語活動のイメージ



学年	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	支援学級
時数	5	5	10	10	35	35	5
担当	学担	学担	学担	学担	フリー ＋ 学担のＴＴ	フリー ＋ 学担のＴＴ	ＴＴ学担
ALT	○	○	○	○	◎	◎	○
主な活動場所	英語ルーム	英語ルーム	クラスルーム 英語ルーム	クラスルーム 英語ルーム	英語ルーム クラスルーム	英語ルーム クラスルーム	英語ルーム

④指導案の形式　　授業作りの工夫がみえるように、形式を設定した。

外国語活動指導案

1. 学年
2. 単元
3. 単元のねらい
4. 単元の指導計画　（　　時間）

時	目標	活動内容
		使う単語や活動を記す

5. 児童の実態　　文章表記

6. 授業作りの工夫

授業作りの工夫がみえるように、整理して工夫点を記す。

例　生き生きと学ぶために
・
　豊かに伝え合うために
・

7. 本時案

① 本時の流れについては WARM－UP　ACTIVITY　CLOSING を基本とする。

○目標
○展開

Process	児童の活動	指導者の支援		備考欄（留意点・評価）
		MTの活動	ALT〈TT〉の活動	
WARM－UP ACTIVITY chants sing game CLOSING				

ACTIVITY の中の、チャンツやゲームはそのつど　書き入れる。

・この授業のメインとなる評価について記す。

授業の工夫がわかるようにふきだしで記す。
コミュニケーション
生き生きと学ぶ
思考する　　など

・備考〈使用教材など〉
○評価

4．これまでの研究で見えてきたこと

成果として

○外国語にふれることで、興味関心をもった子は多い。ききなれない言葉であるからこそ、よく聞こうとしたり、ルールを理解しようとする意欲もみられる。

仮説に関わって

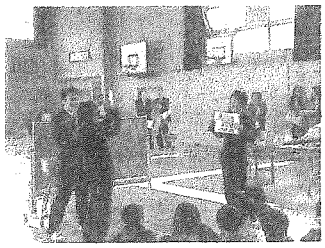
①英語での表現は、ある意味高度であるにもかかわらず、児童は「話し方を知りたい」と願い、「言葉の意味を知りたい」と願う。英語に触れる機会をもつことで、伝える術を学び、さらに伝えることを楽しむ姿が　活動の中でみられている。

②例えば、英語で「私は～がほしい」と伝えるためには、伝え方を学び、自分のほしいものについて決定し、相手の反応を感じ、考えて伝えることが必要となる。
　自分はどう考えるのか、どう伝えるのか、自分とむきあって考えることで、主体的に活動を楽しむ姿がみられている。

③児童は知りえた表現を使ってみたい　と願い、活動が発展する。他者と交流する中で、更に自分について考えたり感じたりする姿がみられる。

～本校の授業づくりの中から～

- 大上段に構えず、教師自身が楽しんで！協力体制も大切
- リアルな活動を　児童はもとめている
  ex)実際に外国人と話す・実際に道案内する・実際に～をもらえる・・・など
- 活動のうらで、待っている子の活動意義を見逃すな！
- 児童が夢中になる工夫って　何ができるかな？
  ex)クイズ形式・ショップ形式・○○コレクション・・・・
- 必ずやらなきゃいけないシチュエーションの設定
- 気のあう子だけでなく、いろんな人と、コミュニケーションする設定に！
- どきどきするから、到達段階を柔軟に（ヒントコーナーやお助けマンの設定　等）
- その子その子のペースを　大切に。



今後の課題として

- ALT 活用の充実
- 校内協力体制
- 教材の開発　研究
- 環境整備
- その他

・本場の外国語に多くふれさせてやりたい。
・５６年の学級担任だけでは、困難。校内協力体制は不可欠。
・英語担当者の育成
・使える教材　つかえない活動
　など　　吟味の余地有り

＊5･6年に関しては、英語ノートのみを教えるというのではなく、補助的な教材として上手に使っていくことが必要と考える

＊また、抵抗感の少ない低学年のうちから、何らかの形で英語にふれさせていくことは、効果的であると考える

＊現時点では、国語力の不足からくる日常的な課題が解決されたわけではない。英語に取り組むことで高まった学びの意欲、表現への意欲などをさらに生かし、さらに育んでいくべき課題は山積している。

（3）　室蘭市立港　南中学校

【研究主題】　生徒の実態に即した基礎基本の学習、生活支援の充実を目指して
～　生徒指導の機能を生かした教育活動を通して　～

1　研究主題

生徒の実態に即した基礎基本の学習、生活支援の充実を目指して
～生徒指導の機能を生かした教育活動を通して～

2　主題設定の理由

＜生徒の実態＞
- 集会時における私語が多かった。徐々に落ち着きつつある。
- 授業に熱心に取り組む生徒いるが、学習規律が守れない生徒もいる。落ち着いて授業を受けることの出来ない生徒もいる。
- 学力差があり、一部で消極的な場面もある。基本的な事項を身につけていない生徒が多い。
- 今は、生活は比較的安定している。

＜保護者・教師の願い＞
- 学習の基礎基本を身につけ、主体的に学習する生徒を育成したい。
- 生徒と教師の相互理解の基、教育活動を行いたい。
- 学力の向上と自己の安定した学校生活を送らせたい。
- 社会性、正義感、倫理観の構築を目指したい。
- 学校行事等の教育活動全般を通して生徒指導の機能を生かしながら支援をしたい。

【本校の教育目標】
「指標」いつも希望に燃えて前進を続けよう
明朗―気力に溢れ、常に健康・明朗な生徒
自主―自ら学び、責任をもって行動できる生徒
創造―創意や着想を大切にし、個性的な魅力ある生徒

めざす生徒像

① 学習や諸活動に真剣に取り組む意欲のある生徒
② 自分の考えを持ち、積極的に表現する生徒
③ 感謝の念と思いやりの心を持って人に接する生徒
④ 協力し合い、お互いの良さを認め合う生徒
⑤ 心身ともにたくましく粘り強い生徒
⑥ 好ましい生活習慣を身につけ、健康に心がける生徒

〖今日的課題〗

変化の激しいこれからの時代を生き抜いていく子供たちに「確かな学力」と「豊かな心」を育むことが大きく期待されている。その知的側面である「確かな学力」とは基礎基本を徹底し、個性を伸ばすことにより、知識・技能に加え、学ぶ意欲や思考力・判断力等を伸ばすことである。「豊かな心」としては基本的な規範意識と倫理観、公共心や他者を思いやる心など、豊かな人間性や社会性を育むことである。その教育活動の支援策として生徒指導の機能を生かした教育活動が必要と考えた。

3　研究の仮説

目指す生徒像として「基礎基本をおさえ、学習や諸活動に真剣に取り組む意欲のある生徒」とし、研究主題に迫るため大きく２つの仮説を設定した。授業における「基礎・基本の定着を図る授業工夫による支援」と「生徒指導の機能を生かした教育活動による支援」。以上の２点の仮説を図ることによって主体性や、積極性を伸ばし、目指す生徒像に近づけるのではないかと考えた。

「仮説Ｉ」
基礎・基本の定着を図る授業工夫による支援
①繰り返し学習の重視
②教材を工夫し生徒の興味関心を引き出す
③学習形態の工夫

授業の中で繰り返し学習や興味関心を引き出す授業、個に応じた課題などを行うことで、基礎的・基本的な知識・技能を身につけた生徒が育つであろう。

視点１―繰り返し学習（家庭学習も含む）を重視することによる基礎基本の学習支援
視点２―教材・教具を工夫し、また、身近な題材を利用しながら生徒の興味関心を引き出すことによる基礎基本の学習支援
視点３―グループ学習や個人学習など学習形態を工夫することによる基礎基本の学習支援

「仮説２」
生徒指導の三機能を生かした支援
①共感的人間関係を育成する
②生徒に自己存在感を与える
③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助する

生徒指導の三機能を生かした授業実践が授業中の生徒の発表が多くなり,学習活動にも 意欲的に取り組む生徒が増え全体として学習意欲が高揚し基礎学力も向上するだろう。生徒指導の三機能を生かした授業づくりで主体性や、積極性を伸ばし、目指す生徒像に近づけるのではないか。

視点１―共感的人間関係を育成すること

【支援活動の具体例】

- 生徒の発表に、うなずきや相づちで応え、共感的に受け入れる
- 生徒に励ましや称賛の言葉をかける
- 生徒同士の相互作用（生徒の発言をつなげ、集団での学びあいになるようにする）を取り入れ、お互いの良さを認めあえるようにする
- 教師主導にならず、生徒のテンポに合わせながら授業を進める

視点２―生徒に自己存在感を与えること

【支援活動の具体例】

- 生徒相互が協同して学習ができるよう、ペアトークやグループトーク、クラストークなどを取り入れる
- 意欲を見せない生徒や学業がふるわない生徒にも、机間指導などによって支援する
- 「よくできたね」、「頑張っているね」などの称賛や承認、励ましを取り入れる
- 発問等を工夫し、多くの生徒に発表の機会を与える

視点３－自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助する

【支援活動の具体例】

- 「一人学び」を取り入れるなど、生徒が自ら考える時間を設定する
- 生徒が自分の考えをみんなの前で表現する場を設定する
- 発表などの表現ができにくい生徒に対し、段階的な指導や意図的な指名などによって支援する
- 生徒一人一人の学習状況を見取りながら、個に応じた指導（支援）をおこなう

４　研究計画

平成２１年度（１年次）

研究主題の方向性を探る
生徒の実態把握（事例研２回）、仮説１の検証・実践、授業評価・自己評価の実践
研究計画の立案、研究仮説・視点の設定、研究組織の確立、授業研での交流

平成２２年度（２年次）

基礎基本の定着を図る授業実践、生徒指導の三機能の検証、実践 生徒の実態把握（事例研２回）、仮説１の実践、仮説２の研究と実践、生徒指導の機能を生かした教育活動のためのチェックシートの活用、授業研での交流

平成２３年度（３年次）

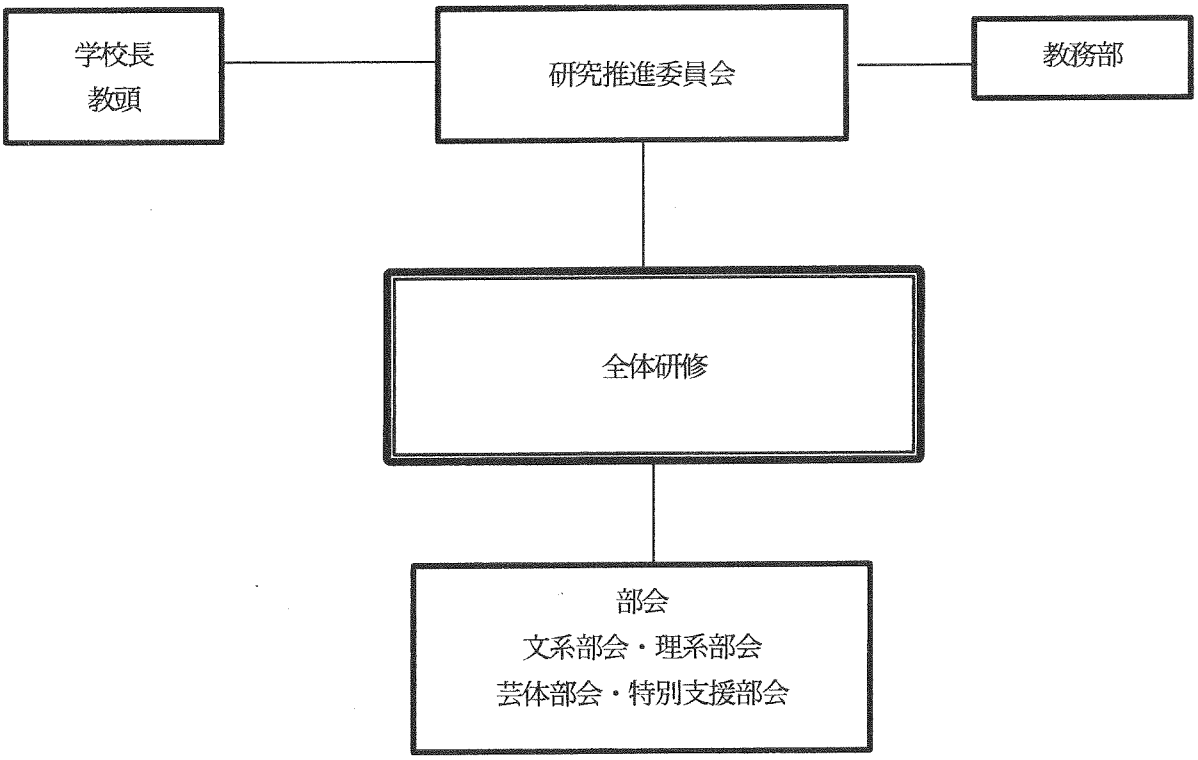
目指す生徒像の育成のための授業実践 生徒の実態把握（事例研２回）、実践交流を通して仮説の評価・検証・まとめ、校内授業研、部会研修、公開研究会、３年間の研究のまとめ

↓

新たな課題の設定　平成２４年度へ

5　研究方法と研究組織

1　研究推進委員会：研究内容、研究推進の方向性の検討
　（教頭、研修係、各部会代表１名）
2　各部会：授業研を中心に授業改善、工夫の研究
　（文系部会、理系部会、芸体部会、特別支援部会）
3　全体研修会：研究主題に沿って、共通理解を図りながら理論研究・協議



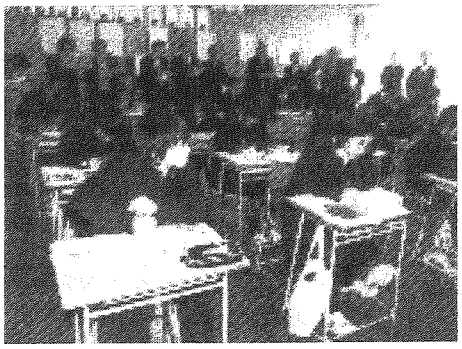
6　実践資料　美術

研究の仮説と視点を生かした指導案の一部

過程	生徒の学習活動	形態	教師の関わり支援	■評価基準 □評価方法
導入	・前時の復習をする（透明・不透明描法、三原色について）	一斉	・前時の復習をさせる （三原色、透明・不透明描法）	■透明・不透明描法に興味関心を持つことができる。 □発言
展開	・説明を聞き、本時内容を把握する。 ・画用紙に色を塗っていく	一斉 個人	・本時の学習の指示説明 ・　水の量に注意させ、教師の指示で色塗りを進めさせる。 仮１視２	■水の量に注意し、丁寧に塗ることができる。 □作品
	仮説１　基礎基本の定着を図る授業工夫による支援 視点２　教材を工夫し生徒の興味関心を引き出す 実際に画用紙に色を塗ることで、自分の手で塗った部分がどのようになるのか興味を持たせる。			
			仮２視３	
	仮説２　生徒指導の三機能を生かした支援 視点３　自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助する 水の量を調節する作業は自己決定であり、成功した達成感は今後の作品制作での自己可能性の開発を援助することができる			
	課題～水の量に注意して透明・不透明描法で色を塗ろう。			
	・班で鑑賞しあう。			■重色の違いに気づくことができる □プリント、発言
	課題～重色の違いに気づくことができる。			
	・　自他の作品から透明・不透明描法の違いを実際に再確認、発見し、プリントにまとめる。発表する。		自他の作品をしっかり鑑賞させる。 ・透明・不透明描法の重色の違いや三原色で色を作ることができることに気づかせる。 仮１視３ 仮２視１・２・３	
	仮説１　基礎基本の定着を図る授業工夫による支援 視点３　学習形態の工夫 透明・不透明描法の水の量の調節を学ぶことができると同時に、実際に三原色を使うことで三原色とその重色・混色によってできる色を覚えることができる。丁寧に塗る練習も兼ねることができる。			

7　研究の成果と課題

【研究の成果】



○　生徒の興味関心を促す教材の活用、学習の形態の工夫など授業の工夫により授業に集中するようになった。

○　授業評価・自己評価を行うことで、授業の振り返り、生徒の学習への規律を高めることができた。(学習に臨む姿勢、忘れ物、チャイム席)

○　生徒指導の機能を生かした学習のチェックシートを活用することで生徒にわかる授業、個性を生かした授業改善を行うことができた。

○　集会時の姿勢、学校祭、陸上競技会等、諸活動の取り組みの積極性が見られるようになった。

【研究の課題】

●　生徒の実態をより把握し、個人の学力差を考慮した授業の工夫が必要である。

●　自己評価、授業評価について検討する必要がある。

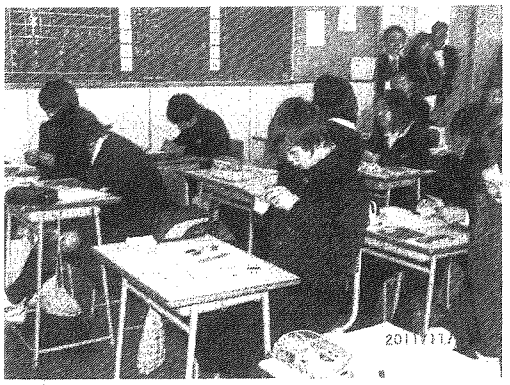
●　生徒指導の機能を生かした学習・生活支援は意識せずとも今後も継続すべきである。

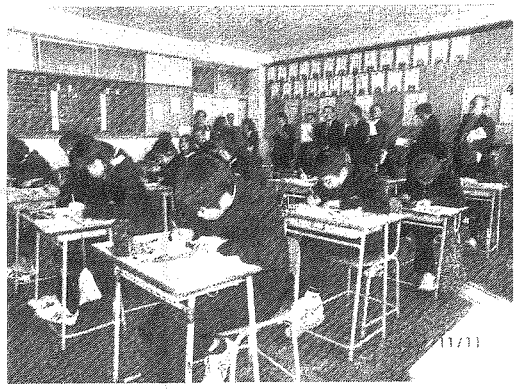
【今後に向けて】

３年計画の最終年ということで、授業実践を行ってきた。基礎基本的な学習に注目することで、課題が明確になり家庭学習においても繰り返し学習の効果が見え、振り返り学習を行う生徒が増えてきた。

基礎基本の力を付けるには各教科における「知識」「技能」の習得につながる。また新学習指導要領の目指す「生きる力」を育むためにも今後は「思考力」「判断力」「表現力」を活かした「活用する学習活動」となるような授業実践を行いたい。本研究が生徒の学力の向上へとつながっているが、今後さらなる学力の向上を目指していくべきである。

次年度以降はこれまでの成果を活かし、更に生徒の実態を見直して研究を推進していきたいと考えている。





あ　と　が　き

室蘭市教育委員会で策定した「室蘭市学力向上基本計画」では、「基礎的・基本的な学習内容の習得と活用」、「学習意欲」、「学習習慣」の３点を本市の子どもたちの課題として位置付けています。

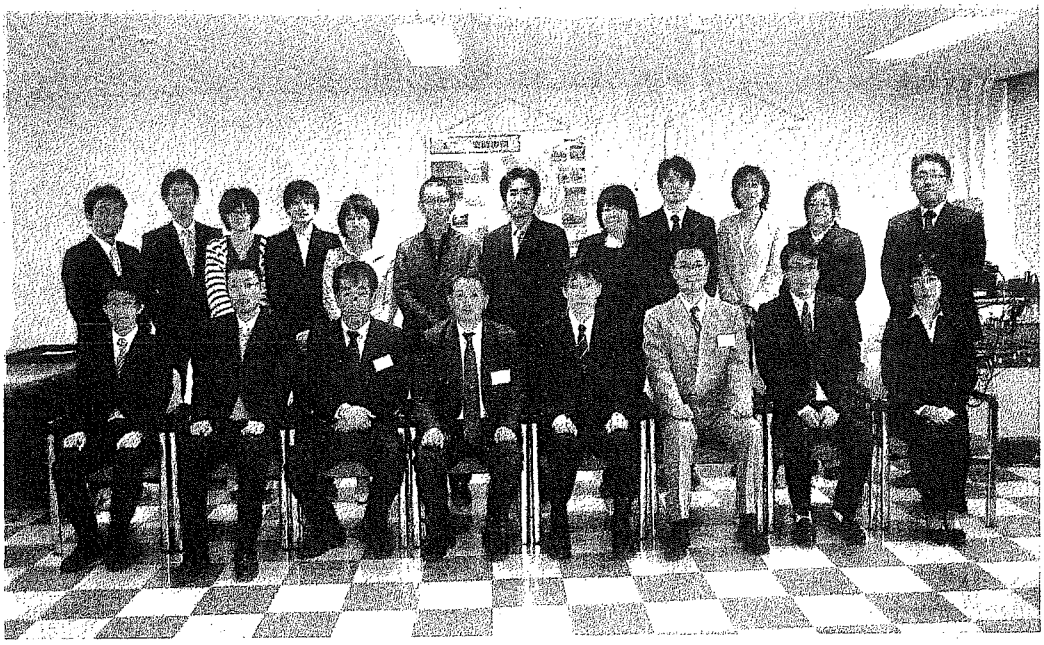
本研究所では、それぞれの課題について焦点を絞り込み、新たに設定した研究主題のもと、研究部は「授業の改善」、事業部は「指導力の向上」、相談部は「学習習慣の醸成」について、解決方策を探るべく今年度から３年計画で研究に取り組んでいるところです。

その具体としては、小・中学校で２回ずつの仮説検証授業の実施（研究部）、今日的な教育課題を踏まえた８つの研修講座の開催（事業部）、各種学力調査の結果を踏まえた家庭向けのリーフレットの作成（相談部）を実施したところです。

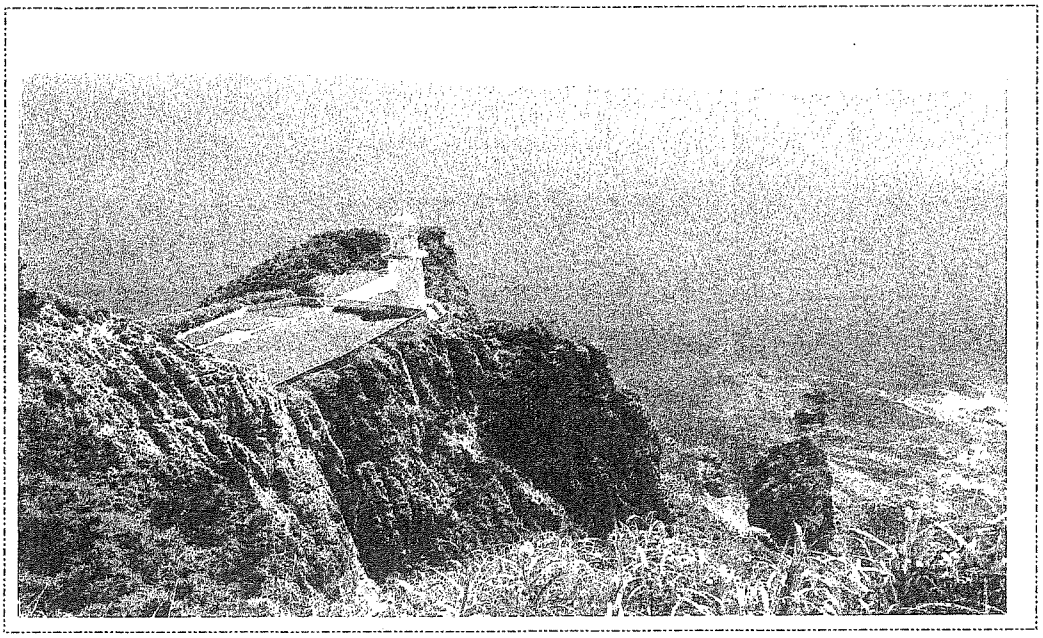
本紀要は、３年計画の１年目のまとめとして発刊するものであり、ぜひ、御一読いただき、室蘭市の子どもたちの確かな学力の向上のために御意見等をいただけると幸いです。

最後に、公開授業研究会、研修講座等の講師や会場校として御協力いただきました皆様をはじめ、教育研究所に御支援と御協力をいただきました関係各位に心より感謝申し上げます。

室蘭市教育研究所
副所長　久　葉　忠　男



（４月１９日～委嘱状交付式）



（「地球岬灯台」遠景 ）

研究紀要　第46号

「　基礎・基本を身に付け、主体的に

学習に取り組む児童生徒の育成　」

発　行　平成24年3月15日
発行所　室蘭市教育研究所
〒050-0073 室蘭市宮の森町3-1-2
TEL (0143) 45-8620
FAX (0143) 43-5149
発行者　所長　酒井　浩一
製本所　北海印刷株式会社